
造られし空の下で ～ 3つの闘魂～

ユウチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

造られし空の下で　　3つの闘魂

【Nコード】

N2189C

【作者名】

ユウチ

【あらすじ】

「ここはゲームの世界です」目が覚めて突然言われた言葉。何かなにやら、混乱するおれ。仲間を探し、ボスを倒す!? 目指すはクリアー!? だけど、それだけでは終わりそうにない雰囲気……。『がんばろう』おれたちの戦いの幕は開かれた。

00：起動（前書き）

どうも、ユウチです。

今回はファンタジー（コメディ）ということで、笑って、お楽しみいただければ嬉しいです。

（ファンタジーと言ってよいのか、疑問ですが……）

それでは、「造られし空の下で　くっつの闘魂」
スタートしましょう。

00:起動

『コンピューター起動』

起動中・・・

『プログラム実行』

データ【S】ロード中・・・
データ【W】ロード中・・・
データ【C】ロード中・・・
データ【M】ロード中・・・

ロード完了

シナリオ
【S】解析中・・・
ワールド
【W】解析中・・・
キャラクター
【C】解析中・・・
マップ
【M】解析中・・・

解析完了

『ガイドプログラム呼び出し』

「お呼びですか？」

「ああ——」

『プレイヤー指定』

「――始めようか」

プレイヤー：3名中3名

『小守 真栄 SHINEI KOMORI』

『吉野 春時 HARUTOKI YOSHINO』

『遠藤 京助 KYOSUKE ENDO』

01：小守真栄 「最悪の朝」

「朝よー 起きなさいー」

眠っていたおれは中年女の声で目が覚めた。しかし、眠いから無視。

「起きなさいー！」

「……………」

「起きなさいー！」

このときは寝ぼけていたから、深くは考えなかったが……。

「……………」

最悪な目覚めだった。

「起きなさい」を永遠に繰り返させるわけにもいかないの、仕方なく目を開けた。

「……………」

体を起こしたおれの目の前に、思ったとおり、中年に突入しているであろうエプロン姿の女が立っていた。何度もおれを起こそうとしていたにも関わらず、その中年女の顔は怒っている様子はない。無表情だ。

不気味だな。とは思ったが、やはり寝ぼけていたから深くは考え

なかった。

「早く下りてきなさいね」

女は一言言って、階段…… ハシゴを下りていった。

「ほーい……」

おれは軽く返事をしてベッドに座った。

「……母親？」

アレはドラマでよく観る典型的な母親像のような……。

しばらくたつと、寝ぼけた頭も、冴えてきた。

おれの名前は小守真栄^{こもりしんえい}。十六歳の明るい高校生。他とちょっと違うのは、十一年間、養護施設で育てられたということ。理由は……
まあ、今は振り返らなくてもいいか。

さあ、現状確認だ。

そこは倉庫のような狭い部屋。パツと見は、木材に囲まれた、ボロいログハウスの中のようなのだ。

寝心地の悪いベッドが三つ（その真ん中のベッドにおれ）、おれの後ろには大きな本棚。それと前には階段がわりのハシゴ……。それだけだ。

十一年間の施設育ち「おれに実の親はいない」あれは……？
おれは胸いっぱい息を吸い込むと、跳ねて立ちながら突っ込んだ。

「ダレ！？ あのおばさん！！？」

うん、目覚めの第一声にしては元気なほうだ。

いや、今はそれどころではない！

「ここはどこだ！？　おい！！」

ここは明らかに見知らぬ部屋だ。

知らないおばさんに起こされ、なぜか母親のように接され、そして、ここは見たことのない殺風景な部屋。

ふと見ると、おれの着ている服にも見覚えがない。白い長袖シャツに深緑のノースリーブジャケット。それと同じような色の長ズボン。さすがに、はいている靴は緑ではないが……。

なぜ、こんな妙な服装を……？

……うん、リアルな夢だな。そう思ったときだった。

「あれはあなたの母親ですよ」

天井のほうから響いてくる声。

とつさに、上に向かって（どこにいるかはわからないが……）叫んだ。

「おれはあんなおばさんの腹の中にいた記憶はないぞ！？」　いや、それは当然か、うん。——って、違う！　知らないぞ、あんなおばさん！！　ここはどこだ！？　そして——　お前は誰だ——っ！！！！」

「……すっかりしましたか？」

「おう。いや、まてまてまて！！　疑問を解消させる——！！」

「ぜーぜー言うおれとは逆に、そいつの声は平然としていた。

「あれはあなたの母親です。説明しましょう。ここは——」

「まて。わかったぞ。お前さては……」

「はい？」

「子供をさらって自分の孫にしてしまおうという、老後を寂しく生きるヘンタイじいさんだな？」

うむ。これで一通りの説明はつく。おれにしてはなかなかの推理だ。

「……………」

そいつは、今度は怒ったような呆れたような声で言った。

「誰がヘンタイですか、わたしはこの世界の案内人です。いいですか？　ここはゲームの中の世界なんです」

「ゲームの世界？　何ゲームみたいなこと言ってたんだ」

……頭がこんがらがった。深く考えるのはよそう。ここは簡単にまとめて……。

「なるほどね。おれ流の計算式で答えを出すならば……」

頭の中の計算機に、情報を入力する。（と、ここでの計算機とはデジタル式ではなく、そろばん式だ）

「『見知らぬ母親＋見知らぬ部屋＋謎の声×ゲームの中の世界』これは夢』だ」

「……………」

「というわけで、寝なおす。さらばだヘンタイじいさん」

再びベッドに入ろうとしたおれのかたわらで怪しい音がした。

ガタガタツ……　ダァーーンツ……！！

大きな本棚が倒れ、グシャーンツ！と、おれを押しつぶした。

「……………」

あわれ、小守真栄の若い命は本棚ごとによって奪われてしまったのだ。

……………て……………

「痛いでしょ？」

「——ん痛いわつつつ！！！！」

辛くも無事だったおれは、本棚と大量の本を跳ねのけ、怒鳴った。

「ほら、夢じゃない」

「ほつぺたを軽くつねるだけでいいんだよ！！！！」

「こちら全身打撲だ！ 肋骨も折れる！！」

「はいはい（わがままなやつ）」

「何か言ったか？」

「わがままなやつ」

「正直だな……………」

なんなんだコイツは……………。

朝からとても疲れた。

「信じてもらえたところで、まずは仲間探しですね」

「仲間？（て、まだ信じたわけじゃないぞ）」

「この世界には、あなたの仲間が2人います」

「ゲームの中の仲間ということは、斧を持った大男とか、魔法使いのお姉さんとか…………？」

「シャレにならん…………。何とかクエストか…………？」

「とにかく、まずはこの家から出ることをおススメします」

「おススメされなくても、とつとどこんなどこ出ますよ」

「まあ、しかし、わたしはあなたたちの案内役ですから。とりあえずわたしのことは『案内人』と呼んでください」

まんまやなあ——とは思うが、とりあえずおれも自己紹介。

「小守真栄だ。でも『シンエイ』じゃなくて『マハエ』って呼んでくれ。そのほうがおちつく」

「かしこまりました。マハエさん」

案内人が嬉しそうに言った。

だから、まだ完全に信じてないって……。

でも、なぜか少し楽しい気分だ。

02：超高性能って……？

おれは案内人のススメにしたがって、ハシゴを下りた。

家の一階も、二階と広さは変わらない。

そこにあるのはテーブルとガスコンロ。フルーツや野菜が入った木箱。それから……等身大の子供の人形……。

人形だよな？ 動かないから人形だよな？
なんとなく近寄りがたい。

これがマジでゲームなら、おれの頭から、たら〜んという汗が表現されるだろう。

開きっぱなしになったドアから明るい外が見える。いや、開きっぱなしではなく……ただ単にドアがないだけか……。

すぐにこの家を去りたくて、早足で出入り口に近づいた。

「あつ！ おにいちゃんおはよ！」

子供の声にビクツとして、横を見ると、小さな男の子が無表情で喋っていた。

さっきの動かない人形だと思っていたのは弟役のキャラクターだったようだ。

「お……おはよ……」

おれは“弟”にぎこちないあいさつをして、家から飛び出た。

ああ……怖い……ロボットかよ……？

しかし、家を出たからといって安全ではない。

「あら、どこかへでかけるの？」

今度は先ほどの母親役。これもやはり無表情で語りかけてくる。
だから怖いって……！！

「案内人ー」

人^{キャラ}がない場所まで走って、案内人を呼び出した。（常に、どこかからおれを見ているらしい）

「はい、なんでしょう？」

上のほうから聞こえる声。

好青年のおれでも、お前が姿を見せたら胸ぐらを掴み上げているところだ。“好青年”のおれでも！

「怖い！　なんだよここは！？」

「ですから『ゲームの世界』です」

「わかった！　信じるから！　信じるからなんとかしてくれ！　あのキャラたち怖い！　せめて表情を入れよう！？」

おれはすばやく周りを見回した。木の陰からあいつらが覗いていたらそれこそホラーゲームだ。

やっぱ、少しも楽しくない！

「気にしなければ大丈夫ですよ」　さあさあ、仲間を探しましょう
」

なんか、うまく丸め込まれた……。

えっと、とりあえず『仲間』の情報を集めればいいのかな？　それがゲームの基本だ、うん。

小さな村の中心あたりに立つと、いろいろなキャラクターがいる。畑仕事をしている若者。草刈をしているおばあさん。大工仕事をしているおじさん。

「……………」

全員がさまざまな仕事を無表情でこなしている。さすがに人間にできることではない……。

何か働いてるキャラに話しかけるのは怖いなあ……。ヒマそうなやつに話しかけよう。

と、一人のおじさん（散歩中であろう）が近づいてくる。

よし、まずはあの人に……。

「あのー、すいませんー」

「兵器をもって平和はつくれない……。力で平和は……」

おじさんは独り言を言いながら通り過ぎた。

「……………」

うん、おれには無理。

とても話しかける勇氣なんて出ないよ。それになんか殺氣を感じたよ？

「ほらほら、勇氣を出して」

案内人が励ましてくるが、おれの耳にそれは届いていない。しかし、あきらめるのはまだ早い！ 当たって砕けるだ！

次は一軒の小さな家を見つけ、中に入った。

そこにはやはり住人がいた。

テーブル横の椅子に座った白ヒゲの老人。よし、これ以上に話しかけやすそうな人物はいない。

とたんにやる気が出てきたおれは、その老人に近づき――

「あのー、すいま――」

「なんじゃ貴様は！ 住居不法侵入じゃぞ！」

「……………」

えーっと…… 嫌にリアルなゲームですね。

——ゲーム的に、ぽいつと追い出された。（ぽいつ、て……）

当たって砕けたところか、粉碎されましたが……？

「ふびん……」

うなだれるおれに案内人が何か言った。

これ…… ゲームとして成り立ってないよね？

ていうか、これから仲間になる人物たちがあれらと同類だと考え
ると気が重くなる……。

「逃げていい？」

「駄目です」

おれは深い深いため息をついた。

【→お屋敷】

村の真ん中に一直線に通る、黄土色の道を進むと、そんな看板が
立っていた。

どうやらここが村の出口のようだ。

お屋敷に向かう一本道を歩きながら、案内人に疑問をぶつけた。

「誰がこのゲームをつくったんだ？」

「制作者です」

「まんじゃねーか」

「それだけしか教えることはできません。ていうか、わたしもよく

わからないんです」

「どういうことだ？ お前はその制作者とつながってるんだろ？」

「まあ、そうですけど…… わたしもつくられて間もないですよ」
「つくられた—— って？」

「説明不足でしたね。わたしは超高性能人工知能プログラムなんです」

……んー…… 反応に困る。人工知能、ということは…… 今おれが話をしているこいつは……。

「人間じゃないのか？」

「はい。プログラムです。」

日本の技術はついにそこまで……！？

おれが驚いた顔をしていると、

「しかし、わたしを生み出すことができたのには、理由があるんですよ」

「だ、だよな！ 日本の技術がそこまで進歩しているわけないよな

ー！ ハハハハハ……」

「詳しいことは訊かないでくださいね。説明する意味がありません」
はいはい……。

そうしている間に『お屋敷』が見えてきた。

遠くから見てもかなり目立つ。そうとうデカイお屋敷のようだ。

いや、ていうか行く意味があるのか……？ こっちの方向へしか道がなかったし、存在しているということは意味があるということだろうが？（ゲームでは、ね）

歩いたら少し体温が上がってきた。

この世界の『太陽』は、どうやら見せかけだけで、熱を出してい

るふうではない。

やはりここは異世界なのか……。

「あいつら…… あっちの世界でなにしてるかな？」

早くもどりたい……。

目の前が暗く見えるのは気のせいなのか、案内人の粋な計らいで特殊効果の影がかかっているのか……。

03：旅の目的　そして脱力

お屋敷――

それは3階建てのドデカイ、とても家とは呼べないものだった。うむ。おれが想像していたお屋敷とはずいぶんとレベルが違う。（おれの脳内はそれほどまでに貧乏臭かったのか……？）

デカイのは屋敷だけではなく、庭もスケールが違う。

おいおいおいおい……。この敷地全部でさっきの村がすっぽりおさまるぞ？

ここつくるのに、制作者野郎は無駄に手間かけすぎじゃ――

視界の片隅に一人の男が小さく写った。

男にしては長めの髪……。

遠くからはそれしかわからないが、見覚えがある。いや、毎日見ているぞ、あの顔！

おれが育った施設には、いろいろな事情をかかえた子供がいる。

親に捨てられた。両親の死亡。虐待。

そんな深刻な子供たちに囲まれて育ったおれだが、同じ歳のやつも何人かいた。

一人は『よしのはめとき吉野春時』

一人は『えんどつきようすけ遠藤京助』

その施設にいる同じ歳のやつは、今はその二人だけ。
その二人とは、施設の同じ部屋に寝泊りしている。いわば兄弟みたいなものだ。特に吉野との付き合いは長い。おれが入ってくる以前からそこにいたのだ。

あれは間違いなく『ヨッくん（吉野）』だ！

同じ部屋で寝ていたんだ。あいつも一緒にこの世界に来ていてもおかしくはない。

んじゃあ、あと二人の仲間って……。

ヨッくんは、庭の白いテーブルとセットの白い椅子に座って空を眺めている。その横に執事服を着た老人。

あー…… ヨッくんも混乱している様子だ。早く合流せねば……。

セキュリティ性ゼロの門を堂々と通過し、芝生の地面を進んだ。
大丈夫！ やつらがプレイヤー^{おれたち}に害を与えることはない。

あらかた近づいたとき、ヨッくんが何かもらした。

「すがすがしい春の朝だね。美しい緑。おいしい空気。そのすべてがぼくを包み込むようだよ。なあ？　じい？」

黙って頷くじい。

「——打ち解けてる——！！！！！！？」

思わず叫ぶおれ。

それにヨッくんは気付いたようだ。

「やあ、マハエ。ずいぶんと久しぶりだね」

「決して久しくなどありません!!」

バンツとテーブルを叩いて、ヨツくんの向かいの椅子に座った。
すると、執事服のじいが言った。

「どうされましたか。ぼっちゃま?」

『ぼっちゃま』? 今のは明らかにヨツくんに対して言ったようだが……?

「ああ、なんでもないよ。じい」

黙って頷くじい。やはり感情が感じられない。

「おい、まさかここ、ヨツくんの屋敷?」

「そだよ」

ニツコリと微笑むヨツくん。

あー……。憎たらしいまでの微笑み……。

「案内人」

「はい、なんでしょうか?」

おれの呼びかけにすぐに応答する案内人はさすがだ。じい以上に!

「本来、同じ身分のはずのおれたちが、かたやボロボロの超貧乏村人。かたや超リッチなドデカイお屋敷に住む金持ちぼっちゃま。……

…この設定には問題、ありすぎだろおお!!!」

服装自体からも明らかかなひいきが感じられる! おれの全身深緑

服に対して、ヨツくんはえりにふわふわが付いた立派な革製のジャケツト! しかもジーパンにブーツとはどういうこっちゃい!?

「わたしに怒鳴られても困りますよ。制作者による設定ですから」

「そうだぞ、落ち着けマハエ。紅茶でも飲む? といっても実際、サンプルみたいなやつで飲めないけどね。ハハハ」

おれは差し出された食品サンプルのようなティーカップを叩き落とした。

「もういい。この不公平な設定は、まあ、我慢しよう。それよりも、これからのことをよく話し合おうではないか」

「これからのことって、魔王討伐だろ？」

ハハハ、と笑うヨックン。

「魔王討伐？ そんなの聞いてねーぞ」

いや、RPGっぽいゲームだから、普通、魔王討伐が目的なんだろうけど、それはテレビゲームの場合であって、このゲームは普通とは違う。よってヨックンのそういう推理は――

「そう案内人が言ってたよ。さっきこっちに来たとき」

「あ、そういえばマハエさんに言うの忘れてました。てへっ」

「案内人、コノヤロ……」

おれは拳を固めたが、どこを攻撃してよいのかわからず、その怒りを押し込めることにした。

「そうです。あなたたちの目的は『魔王討伐』。魔城を目指してください」

「よし、それじゃあ、行くな。楽しもうぜ、マハエ」

「……………」

ヨックンは、白いテーブルに溶けたおれの頭を叩いてさっさと歩いていく。

「あー……」

あいつ、あんなにも楽天主だったのか？

「いつてらっしゃいませ、ぼっちゃま」

じいの言葉を背に、おれたちは旅立った。

……魔城へ。

ああ、でも仲間というのがヨッくんによかったよ……。これで不安の一部は解消されたわけだ。

「んで、この流れだと、あと一人は『エンドー（遠藤）』だよなー？」

「そうかもね」

ヨッくんはなぜかさっきからウキウキしている。

こんなに明るいやつだったけ？ まさか、ニセモノ？

……いや、それはないな。長い付き合いだ。こいつの性格は誰よりもよく知っている。

つまり、めずらしい状況が好きなやつなのだ。それが、先ほどのリッチな気分の余韻か？ 両方だな。

「ん？ こつちか」

おれたちは、さっきおれが歩いてきた一本道を逆戻りしていた。その途中に、たしかにさっきまではなかった横道があった。

ヨッくんと合流することが、次へ進む条件だったのか。

横道へ入ると、そこからはまた一本道だった。

かなり単純なつくりのようだ。

ヨッくんが案内人に訊く。

「ねえ、モンスターはいないの？」

ヨッくんよ、そういう質問はやめたまえよ。モンスターなんて出てきたら……。

「しばらくは出てきませよ。安心してください」

舌打ちしたのはヨッくん。ホッとしたのはおれ。

しばらくは、ということはいずれ戦うことになるのだろうけど……。

なんだかな。

それから少し歩くと、前方に一人の人物が。おばさんキャラのよ
うだ。

よし、気合入れて―― 無視しよう。

「……………」

「……………」

「あつ、ちょっとあんたたち
向こうから話しかけてきた。

へえ、そんなキャラもいるんだなー。と少し感心。

「なんでしょうか？」

ここは答えるしかない。

「じつはねえ、この先の墓地に不良がたむろしてんのよ」

「ほう」

ヨッくんは腕組みをして話を聞いている。

おれは正直、関わりたくない。不良は苦手なのだ。

「なんだか、道に迷っちゃってねえ。その墓地の中を通らないと帰
れないと思うのだけど……………」

ふむふむ。と、おばさんの話を聞いたヨッくんが胸を張る。

「わかりました。ぼくたちがなんとかしましょう」

あ、引き受けちゃった。

がんばれヨッくん。勇気ある若者だな。

―― イヤマテ。ぼく“たち”って言った？

「行くぞマハエー！」

「ちよつとまで――！！！！」

おれのえりをつかんで引きずるヨッくん。

だから不良は苦手なの……っ！！！！

「どうして引き受けちゃったんですか？ 吉野さん」

「そうだそうだ！ なぜ引き受けた！？ バカヤロー！」

「え、だって、引き受けないと先に進めないとかじゃないの？」

「いえ……それが違うんですよ……」

「どゆこと？」

「あのキャラは、設定外…… というか、存在するはずがないキャラです」

おれたち二人は同時に首を傾げる。

「はあ？」

存在するはずのないキャラって？ まさかバグ？

「詳しいことは後で説明しますよ。まさか、あれが出てくるなんて

……」

頭にクエスチョンマークをうかべるおれたち。

『あれ』ってなんだ？

そういえば、さっきのおばちゃん、今までのキャラとは違う雰囲気だった。

表情があつたし、受け答えしてたし。

「ま、引き受けちゃったものは仕方ないですねー がんばってください」

「まって……！ 案内人……！！ 裏切るなあああ……！！」

そして墓地へ――

そこは洋風の墓が並び、小さな墓地。

その真ん中で、二人の不良が焚き火をしていた。

な……なんだ、二人か……二対二なら戦闘に入っても勝てるかな。これでも、日々体をきたえているのだ！（おれは）——まあ、ヨツくんだって、自分で引き受けたくらいだからケンカには自信あるのだろう。

「あ！？ んだてめえら！？」

髪を紫色に染めた不良二人。髪型も服装も、見事なまでに統一された格好だ。

おいおい、こいつらヤバそうだぞ。大丈夫なんだろうな？ ヨツくん！

「おい、お前ら！」

お、ヨツくんも負けず劣らずだ。できればケンカには発展させないでくれよ。

「何だってんだ！？ ああ！？」

ヨツくんがフンツ、と鼻を鳴らし、かまえる。

とりあえず、なめられないようにおれもかまえる。

しかし、ヨツくんはやはり悪魔だった。

「……こいつが話があるそうです。聞いてやってください」
と言うと、おれを前に残して一歩下がった。

「……………あ、そういうこと……………」

お前は最低のクズだ——！！！！！！

人物データ＜小守真栄＞

人物データ＜小守真栄＞

【案内人】「マハエさん」

【真栄】「なんや？」

【案内人】「詳細な人物データをつくるので、いくつか質問に答えてもらいます」

【真栄】「データ？ そんなの必要なの？」

【案内人】「データ収集は必要不可欠です」

【真栄】「へー、そうなの」

【案内人】「それでは質問を始めます」

【真栄】「強制なんだね」

【案内人】「まず、名前は『こもりしんえい小守真栄』年齢は『16歳』これは間違いないですね？」

【真栄】「ああ、よく調べたな」

【案内人】「それじゃあ、なぜ『マハエ』なんですか？」

【真栄】 「『真栄』て『マハエ』とも読むだろう？『マハエ』ってのは『南風』っていう意味もあるんだ」

【案内人】 「なるほど。では次の質問。「身長と体重は？」」

【真栄】 「身長は……『168』くらい。でも『170』って記録しといてくれ」

【案内人】 「はい。『168』ですね。『体重』は？」

【真栄】 「……『52キロ』」

【案内人】 「なるほどなるほど。では、「何月生まれですか？」「血液型も教えてください」」

【真栄】 「『1月12日生まれ』、『A型』」

【案内人】 「好きなものは？」

【真栄】 「『大自然』！」

【案内人】 「はい、オーケーです」

【真栄】 「終わり？」

【案内人】 「では、なぜあなたは養護施設に？」

【真栄】 「あー、そのことか。よくわからないけど、両親が、五

歳のオレを置いて行方不明になったらしい」

【案内人】「なるほど」

【真栄】「訊いちゃ悪かったとか思わないの？」

【案内人】「べつに？」

【真栄】「あっそ」

<小守真栄 詳細データ>

- ・名前 : コモリ シンエイ
- ・呼び名 : マハエ
- ・身長 : 168センチ
- ・体重 : 52キロ
- ・誕生日 : 1月12日
- ・血液型 : A型

04：墓地の中心で絶叫するのは

ヨツくんはハメられて不良の相手をまかされたおれ。

ヨツくんはおれの後ろで、案内人と一緒になって、かつさいを送っている。

あの馬鹿を殴るのは後だ。

すばやく頭の中で計画を練った。

戦闘になった場合はどうする？ 現在、敵は武器を持っていない。つまり素手VS素手だ。しかし、ナイフを持っている可能性もある。つまりその場合、接近戦は不利。ということは――
おれは目の前の焚き火に目をやった。

「えーっと……」

……よし！ これでいこう、完璧だ！

二人の不良をにらみ、そして――

「熱によって温められた空気は、軽くなり、上へとぼっていきま
す」

おれは焚き火を指差して、ゆっくり上に上げる素振りをする。

「これを『上昇気流』といい、それに合わせて周りの空気も移動します。つまり、この空気の動きというのが『風』というわけなんです
ね」

よし！ ばっちり言っちゃった！

………なにを……？

「だから何だってんだ！？ ああ！？」

「いえ、ですから……」

「てめえ、おれたちを馬鹿にしてんのか!? ああ!？」

「けっしてそんな……」

「ふざけやがってよぉ!」

「えっと……」

あれ? 逆効果だった?

「はぁ……」

誰だ? 今ため息をついたのは! …… ヨツくんと案内人だ。

不良A(仮)が指笛を吹いた。

すると、草むらや木の陰から、そろそろと同じ格好をした不良の仲間が集まってくるではないか!

おれは、後ろでこそそこそと逃げようとするヨツくんの首を引つつかんで、横に並ばせた。

集まった不良は総勢九人。

左から不良、不良、不良、不良、不良、不良、ゾンビ、不良、不良――

――て、オイコラマテヤ。

「右から二番目え! そのとなりにいるのはなんじゃあ――!!?」

おれはつい叫んだ。

「は? えっ―― ぐあああっ!――!」

ゾンビが、右から二番目(不良G)に噛み付いた。

血を流し、崩れ落ちる不良G。

「な!? どうした!？」

両隣の不良がGを支える。

Gがおれたちをにらむ。

「てめえらあ…… よくも……」

「なぜぼくら!?!」

「おいおい! 今のは明らかにそのゾン—— って、いねえし!」

さっきまでたしかにいた、マンガチックな、茶色の面白い顔をしたゾンビのような生物はいない。

「あららら……。いや、ですからそれはおれたちじゃな——」

「問答無用だ!?!」

<しばらくお待ちください>

「……………危うくゲームオーバーになるとこだ。せつかくおれが風のしくみをわかりやすく説明してやったのに……………」

おれはコブだらけになった頭と、アザだらけになった顔をおさえながら、墓地から撤収した。

「まったく、最近の若者は喧嘩っ早い」

ヨツくんがとなりで、頬にちょこんとだけ付いたかすり傷をこすっている。

「……………なぜ、キミはそれだけしか傷を負っていないんだい?」

「さあ?」

理由は簡単。こいつの戦いの90%以上が『おれを盾に使う』だったからだ。

しかもおれの後ろで、おれの声を真似て（似てないが）やつらを挑発するし。

ごまかすように笑うヨツくん。

「ま、なんにしても多勢に無勢だったな」

「お前がおれを盾にしなければ、おれはここまでダメージを受けることはなかった」

思い切り殴りたいが、今のおれにそんな力は残っていない。

「情けないですね……これじゃ、魔王にも勝てませんよ？」

案内人があからさまな溜め息と一緒に言った。

怒鳴る気力もないが、やはりむかつく。

「じゃ、お前がなんとかしろ！」

おれの言葉に、案内人はあつさりと言う。

「仕方ないですねえ。ちょっと待っててください」

……え？　なんとかできるの？

「……………」

「うわっ！」

墓地のほうで不良の叫び声。

更に――

「な……なんだこれは……！？　うわああ！？」

「ひえええ……………」

「ぎゃあああああああ……！！！」

（振り向いちやダメだ。振り向いちやダメだ）

おれたちは墓地に背を向けて、そう心の中で繰り返していた。けっして振り返ってはいけないと思ったからだ。

「うお！？ うお！？ うおおおおおお！！？」

「うわあああああ！！！」

やつらは何を見ているのか。とにかくおれたちはそれを見たくなかった。

しばらくの絶叫の後、ギョォーン！ という空間がねじれるような大きな音を最後に、墓地は静寂を取りもどした。

「……………」

「……………」

「お待たせしました」

明るい声でもどってきた案内人に、さっそく—— おそろおそろ訊いてみる。

「お前、何をした？」

「とくに恐ろしいことはしていませんか？」

「さっきの絶叫を聞いて恐ろしくないという言葉は信用できない」

まあ、でもそんなことを考えていてもどうにもならないから、とりあえず案内人を信じて振り向いた。

「……………」

誰もいない。

あんなにいた不良どもが、まるで砂になったかのように姿を消した。

もう一度はつきり訊く。

「お前、何をした？」

「ワールドの一部をクリーンアップしたんです。その範囲のキャラクター、又はそれ以外のプログラムをデリートし、初期化しました」よくわからないが、問題解決か。

でも、さっきのやつら、かなり人間ぽかったな。なんだったんだ？

「追っ払ってくれたかい？」

さっきのおばさんが駆け寄ってきた。

おれは思わず、傷だらけの顔を隠し、後の対応をヨツくんにかかせた。

「バツチリですよ。もうどこかへ消えました」

本当の意味でな……。

「そうかい。ありがとうね。なにもお礼できないけど、ゴメンね」お礼くらいしましょうよ。おれ、死にかけたんですよ。なんてことは言えない。

「それじゃあね」

おばさんは墓地を通る道から、奥に見える町へ入っていった。

そのとき、空間が微妙にゆれたように見えたが、気のせいだろう。

「ドンマイ、マハエ」

ヨツくんがおれの肩をバシバシ叩くが、誰のせいでこうなったと思ってるんだ？

「さあ、あなたたちも同じ道へ行ってください。それと、話すこともありますので」

「……………」

なんか、ここ通るのやだな……。

「行こう行こう」

ヨッくんはおれにかまわずさっさと進む。

おれは気を取り直すヒマもなく……。

05：三人の勇者

「おかしいぞ……」

墓地の中を通る道。そこを抜けたら町に着く――はずだったのだが……。

ヨックくんも左右を見回す。

「あのおばさんはどこだろ？」

「……………」

おばさんだけじゃない。さっき墓地の向こう側から見えていたはずの町がそこにはなかった。

そこにあるのはまた、長い一本道。

案内人ゝに相談だ。

「案内人、どう思う？」

「さあ、わたしにもわかりません。ていうか、本当に町が見えたんですか？」

疑わしく訊き返す案内人に、おれは怒った声で言う。

「本当だよ。たしかに、でかい町が見えた！」

「蜃気楼―― てことはないよな？ この世界で。」

「マップデータのどこを見ても、そんな町はありません」

「バグかな？」

ヨックくんも考えている。こいつもあの町を見たのだろう。

「……もしかして、あれと関わりが……？」

案内人がつぶやく。

どうかしたのかと訊くと、

「あ、いえ、なんでも……」

ごまかすような言葉を返された。

「まあ、ここまでぼう大なプログラム世界なんだし、バグがあつて当然でしょ」

ヨツくんは平然そうに言っているが、よく考えたら、そのバグでもどれなくなるかもしれないじゃないか？

あつ、不安要素がまた一つ増えた……。

ここに閉じ込められるのだけは勘弁してくれ。

「吉野さんの言うとおり、ただのバグでしょうね。心配はいりませんよ」

いや、だからそれが心配なんだって……。

おれは皮肉を込めて言う。

「超高性能でもわからないのか？」

「超高性能だから、です。失敗をしない人工知能というのは完璧ではありません」

そして、それをフォローするヨツくん。

「なるほど。人間に近いほど性能がいいわけね。」

「そうです！ さすが吉野さん」

む、なんかこいつら、かなりウマが合ってるな。おれだけが孤立しているではないか。

「うーむ……」

胸にもやもやを残しながらおれたちは進んだ。

十分後――

無駄に長い一本道を無駄に体力を使つて行き着いた場所は、小さな町だった。

「もしかして、見えたのはこの町ですか？」

おれはさつき見えた光景を思い出す。

「いんや、もつと大きかったぞ」

「うん、こんな手抜きが目立つ町ではなかった」

と言ったのは、何気なく毒舌なヨツくん。

「ふむ…… 謎ですね」

『手抜き』の部分には触れないんだ……。

実際、この町の広さは、あの村の四倍くらい。

赤や、茶色い屋根の家が適当に並べられている。

でも、『町』と言うだけあって、道路のデザインは、黒い石畳のようだ。道路以外の地面は、黄緑色の芝生。そこかしこに街路樹も設置してある。

ちゃんと作ってあれば、本気で住んでみたい町なだけどなあ。
人間関係はうまくいきそうにないけどね……。

おれは目の上に手をかざして、人間—— キアラ観察を始める。

「やっぱキアラが多いなあ」

散歩をしている人、家の窓から外を眺めている人、きやつきや言いながら鬼ごっこをしている子供たち。無論、全員が無表情で。
（やっぱり住みたくねえ……）

木陰で読書している人、畑でクワを振り下ろす人——

「いんやあゝ 体を動かすのは気持ちいいっぺ」

……… 妙ななまり語でマキ割りをしているエンドー。

「うらゝっ！」

エンドーの尻にとび蹴りをかます。
ったく…… どのいつもこいつも……。

「二人目の仲間。『遠藤京助』を見つけた。」

エンドーは、すぐに起き上がって、マキ割りを再開する。

コーン…… コーン…… コーン……

気持ちよさそうにナタでマキを割り続ける。（なにくわぬ顔で）
気付いてない、なんてことはないよな？

次ははっきりと声をかけてやろう。

「おい、エンドー—— ぐほあっ！」

エンドーが後ろに投げたマキがおれのひたいを直撃した。

ふ…… 復讐か……？ これ以上コブつくってどうするよ？

「おん？ おおー ヨツくんにはマハ……… エじやなあかあー。」

こおな田舎町までよお来たのおー」

さらになまりを加えてしゃべるエンドー。

こいつ…… おれの顔見て笑いやがった。（今のおれ、どんな顔
になってんだ？）

仕方ない。思う存分マキ割りをやらせてやろう。

「行くぞ、ヨツくん。目指せ魔城だ！」

「おー」

「まゝてゝよゝ！ まじめにするからあゝ！」

その場を立ち去ろうとすると、おれの背中に思いきりしがみつく

ええい！ こなきジジイか！

——エンドーを振り落とす。

「いてーなー、こんにゃろー」

文句を言うやせつぼちのこの男が、遠藤京助、通称エンドー。

はつきり言つて口が悪い。（おれよりも）

おれたち三人を並べたら、ちょうど大中小の大きさだ。大がヨツくん、中がエンドー、そして……。

「……さあ！ これで三人そろつたわけで、次は魔城を目指すんだよな？」

「まてや、マハエ」

気合を入れて歩き出したおれを、エンドーが止めた。

なまり語は完全に消えたようだ。

「さつき、マキ割りを手伝つてたところの人に聞いたんだけどよ。

よく当たるって評判の占い師がいるらしい。で、案内人が言っていた『魔城』のことを、そいつに教えてもらえってことじゃねーの？」

エンドーの情報に、おれはうなづく。

「なるほど、たしかにそうだな」

おれたちの中で一番のRPG経験者のエンドーが言うんだ。そのへんの勘は鋭いはず。

ヨツくんがエンドーに質問する。

「その占い師がいる場所、知ってるの？」

「徒歩五分」

即答するエンドー。

近っ！

「ついてこーい」

さつきまで無駄に長い一本道を歩かせやがったくせに……。

先導するエンドーに後について、占い師が住むという場所へ町を進んだ。

単調な行動しかしないここの住民たちに対して、おれたちはかなり目立つのだろうな。

三人仲間がそろって、おれはハイな気分になっていた。

占い師の家は町の中にあるものだと思っていたが、エンドーは森の中へ入った。

おれとヨツくんもそれに従うが、なにやらモンスターが出てきそうな森だ。

武器はない。もし遭遇したら全力疾走だ。

……それにしても……。

「んふふふ……」

にやけるおれを見て、ヨツくんが引く。

「なに？ 気持ち悪いな」

「なんでもない」

とは言ったが、おれが笑っているのは、エンドーの服装だ。

エンドーも、やはりジャケットを着ていて、基本は貧乏^{おれ}村人と変わらない。

おれと同じようなデザインの真っ黒なジャケットに真っ赤な長ズボン。

ふ…… 貧しい家育ち（設定上）はおれだけではなかったのだ！
こうなると、ヨツくんの服装は一人だけ浮いてくる。

おれはヨツくんのジャケットを見た。

「ねえ、そのふわふわ取れば？」

「やだ」

エンドーは黙っておれとヨツくんを導く。徒歩五分なら、もう少しで着くだろう。

この先に何が待ちかまえているのか。

この先にどんな強敵がいるのか。

おれたちはまだ、この時点ではその気配に気付いていなかった。
この先に待ち受ける強敵の気配に……。

06：強敵、占い師

つり橋——それは危険をまねくもの。

つり橋——それは落ちるもの。

つり橋——それは恰好のトラップポイント。

「……………」

「……………」

「……………」

五分後、森をぬけたおれたち三人は、危険な臭いのするソレを前に、この後の展開について考えていた。

とりあえず、思っていることを口に出してみる。

「なあ、コレはアレだよな」

ヨツくんも。

「うん。このベッタベタなゲームでコレが出てくるといつことは…

……………」

エンドーも。

「これからおれらの身に起こることといえれば……………」

……………うむ。おれたちの考えは完全に一致している。

そう——

この『つり橋』の向こう側に、占い師の家があるのだ。

渡つてしまえばいいさ。なんていうのは素人考えだ。
おれたちは確信している。

『このつり橋は、落ちる！！！』と。

「……………」
「……………」
「……………」

橋の下では、ゴォーゴォーと川の音。

「行かないんですかあ〜？」

黙りこむおれたちを案内人がせかす。
きっとこいつは知っているのだ。これからおれたちの身に起こる
ことを。

そしてあざ笑っているのだ！

さあ、どうする？ わざとこのトラップに引っかかるか、他の道
を探すか。

いや、考えるようなことではない。その二つから選ぶとすれば、
おれたちは絶対に、ここを渡らない！

「……………おれの考えでは……………」

エンドーが何かを考えついたようだ。

「おれらは、ここを渡るしかないのだと思う」

「……………」

「……………」

沈黙するおれとヨックン。

エンドーの解説。

「RPGで先に進もうとすれば、必ず起こることがあってな。それが『強制イベント』だ。プレイヤーの意思とはべつに、強制実行されるイベント。これをなくしてRPGは成り立たない」

「……………」

「……………」

つまり、おれたちに川に落下しろ、と？

おれは川を見下ろした。

ゴオオオオオオオオオオ…………

「……………」

ゴオオオオオオオオオオ…………

「……………」

無理だろ…………。

高さは7メートルほど。川の深さはわからないが、とにかく深そうだ。

それにこの音…………。

「制作者は、おれたちを殺す気か？」

エンドーのいう『強制イベント』は、『強制ゲームオーバー』を意味しているのでは？

悩みは深まる。

「こつも考えられないかな？」

こんどはヨックん。

「実はそんな強制イベントはなくて、ぼくたちがここで悩んでいるのを見て、制作者は腹を抱えて笑っている」

「あー……十……分、ありえるなあ……」

おれは大きくうなずいた。

このゲームをつくった制作者は、推測するに、自己中心的で、天邪鬼な、たちの悪い子供のようなやつだろう。

ここはやはり、RPG経験値の高い、エンドーの意見を聞こう。

「そうだな。ゲームやアニメでつり橋が落ちるのには、何かしらの条件がある」

エンドーがあごに手を当てて続けた。

「橋の老朽化。上から岩か何かが落下し、橋を破壊。一番ベタなのが、敵によるロープの切断だ」

「ふむ……」

橋の老朽化——このつり橋は、どう見ても古くはない。新しい木の色だ。

上から何かが落下——橋の上のほうに広がるのは青い空。何かを落とせる足場はない。

ロープの切断——向こう側にも、こちら側にも、敵らしい存在はなし。

すべて確認をしてから、エンドーに訊く。

「つまり……安全ということか？」

「現実的に考えればな」
現実的に…… ね……。

おれはしばらく考えるフリをし、そして不意について振りかぶった。

「最初は――」
「じゃんけん――」

「グー！」
「ホイ！」

全員考えることは同じ――

おれ『グー』
ヨッくん&エンドー『パー』

「……………」

「マハエの一人負け。残念だったね」
自分の『グー』を見つめるおれの肩を、ヨッくんが優しく叩く。

「……………」

沈黙。

「がんばれ！」
白くなるおれの頭をエンドーが優しくなでる。

「……………」

崩壊。

またしてもハメられた……！
おれが不意にじゃんけんを持ち出すのも、最初は『グー』で始め

るのも、すべて読まれていた。おれをよく知るこいつらにしかできないことだ。

おれは正直、すごく感心した。が、おれの負けは変わらない。

「やり直しの要求は——」

「無理だな」

二人同時に即答。

「……………」

大丈夫だ。おれは負けない。つり橋なんかには負けない！

走れ！ 風になるのだ！

「おりやああああああ！……！」

ブチッ！

「うわああああああ……！！！！」

……ドボン！

…………… ああ…………… 馬鹿だった。
おれの体は流され、そして——。

「大丈夫？ マハエ」

全然心配じゃなさそうなヨツくんの声。

「死んだか？ アハハハ」

おれの災難を心から笑うエンドーの声。

しばらく死んだふりでもしておけば、少しは心配するか？

心の中で「それはない」と、首を振り、勢いよく起き上がった二人の頭にゲンコツをかましてやった。とくにヨツくんには倍以上に力を入れた。（あのときの分じゃ）

さて、なぜおれは川に落ちたのでしょうか？

じゃんけんで返り討ちにあったおれは、“一見”安全そうなつり橋を、風のごとく駆け抜けようとした。

すると、エンドーが言った、三つの『つり橋落ちる条件』を完全無視したつり橋トラップに見事引っかかり、落下。

突然ロープが切れたのだ。

『落ちる条件』の最後に一つ加えたほうがいいな。

『つり橋はときに、自然の法則を無視する！』

「いつてえっ！ 元気じゃねーか！」

エンドーが頭をこしこしさすりながら、おれに反撃する。

でもな、ヨツくんを見ってみろ。

どこかの星の言葉を叫びながら、地面でのた打ち回っているぞ。

それと、さっきから案内人が発言しないのは、陰で笑っているからか？

ここはがけ下の川岸。

壊れたつり橋がすぐ近くに見えることから、あまり流されていないかったらしい。

二人は、垂れ下がったつり橋を利用して下まで下りてきたのだらう。

うー、クソツタレー！ 制作者めえ！

顔面打撲の次は、服までびしょびしょに—— なってねえ……。

あれ？

流れる川の水。見た目は水だ。だが手をつけてみると、冷たい感じはあるが、ぬれることはない。

ふむ。これがプログラムの限界か。

おれたちは、ところどころ川から突き出ている岩を飛び移りながら、反対岸へ到着。

そのこの崖にハシゴが用意されていて、そこから上へ登った。（やはりあれは強制イベントか……）

その間、ヨツくんエンドーはぶつぶつと文句を言っていたが、おれは気にしない。

占い師の家——

【占いの館！】と、大きな文字の看板が目につく。

とはいっても、全然『館』ではない。並サイズの『家』だ。心の中で突っ込んでからドアを開けた。

入ると、そこは『占いの間』だった。（それは当然だが、あからさまに『占いの間』なのだ）

紫色の照明、ろうそく、テーブル、水晶玉……。

しかし、かんじんの占師がない。

「こんにちはー」

呼びかけるが返事はない。

留守か？

「向こうのドアが開いてる」

ヨッくんが奥のほうの半開きのドアを指した。

「こんにちはー……」

おれが先頭に、ドアをそっと開いて中をのぞく。

「……………」

その小さな部屋にあるのは、ちゃぶ台、本棚、たんす、かまど、床の血痕、ハンマー、占い師の死体。

「……えー……」

目をこすって、頭を振って、もう一度。

ちゃぶ台、本棚、たんす、かまど……。床の血痕、ハンマー、占い師の……。死体……？

「……事件の臭いだ」

エンドーが、むふふ、と笑った。

「案内人！」

久しぶりに案内人を呼んでみる。

「なんででしょうか？」

「これ、『RPG』だよな？」

「はい、『RPG』です」

「これはなんだ？ おれたちに『犯人をさがせ！』みたいなことをやらせたいの？」

すると、案内人は黙った。

しばらく黙ってから、ぼやくように言った。

「やはりおかしいです……。普通のバグなんかじゃないですね……」

「なにが？ まさか、これも設定外？」

「ははは……。おいおい、笑い事じゃないぞ……」

「設定外というよりも……。『プログラムは血を流しません』」

「……はあ？」

おれたちは三人同時に疑問符を出した。

プログラムというのは、この世界に登場するキャラクターたちのことを言っているのだろう。

ということは、今、目の前で倒れている占い師は……？

占い師の手には、ハンマーが握られている。つまり、何者かと争ったということだ。

設定外の何者かと……。

おれは深呼吸して、上をにらんだ。

「詳しい話を聞かせてくれ」

人物データ＜吉野春時＞

人物データ＜吉野春時＞

【案内人】「吉野さん！ 詳細な人物データをつくるので、いくつか質問に答えてもらいます」

【吉野】「人物データって？」

【案内人】「データ収集です。必要なことですので」

【吉野】「……………」

【案内人】「それでは、質問を始めます」

【吉野】「ん」

【案内人】「名前は『吉野春時^{よしのはるとき}』 年齢は『16歳』 これは間違いないですね？」

【吉野】「だろうね」

【案内人】「（だろうねって……）では、「身長と体重は？」」

【吉野】「身長は、『175センチ』だったかな。体重は『60キログラム』」

【案内人】「ふむふむ。では「何月生まれですか?」「血液型も教えてください」

【吉野】「『7月5日生まれ』で『B型』」

【案内人】「好きなものは?」

【吉野】「さあ? まったり?」

【案内人】「そうですか。なるほど……。素直に答えてくれてこちらも楽です」

【吉野】「ふっ……」

【案内人】「最後に、あなたはなぜ養護施設に?」

【吉野】「……………（ギロツ）」

【案内人】「は、はい! これで終了です!（汗）」

【吉野】「ん? そうかい」

【案内人】「……………」

<吉野春時 詳細データ>

・名前 : ヨシノ ハルトキ

・呼び名：ヨツくん
・身長：175センチ
・体重：60キロ
・誕生日：7月5日
・血液型：B型

07：異質の世界

占い師の家から、おれたちはとりあえず町へもどった。

案内人の話。それをあんな場所で聞くのは嫌だ。

公園のような場所で、おれたちは立つたまま向かい合った。（ベ
ンチに変なおじさんが座っていたから）

「さあ、教えてくれ。お前がおれたちに話があると言っていたのは、
このことと関係あるんだろう？」

「はい」

おれの質問に、案内人は素直に返事をした。

「プログラムは血を流さない。っていうのは？」

これはヨツくんの質問。

「それは、殺せるプログラムと、殺せないプログラムがある、とい
うことです。殺せるプログラムというのは、モンスターや、その他
敵キャラ。殺せないプログラムは、テレビゲームでも同じで、住民
キャラたちのことを言います」

「殺せないようにできてるキャラは、どうやっても殺せない。とい
うことだな」

エンドーが簡単にまとめた。

「そう、しかしあの占い師は……」

設定されてもないのに、血を流して死んでいた……。

「原因はわからないのか？」

おれの質問に、案内人は、

「おそらく、これは……。『知能プログラム』が原因でしょう」
「なにそれ？」

「『知能プログラム』は、わたしのように高い知能のプログラムです。といっても、それはまったく異質なものですけど……」

おれは乗り出すように反応する。

「異質とは？」

「プログラムではない。と言ったほうが正しいかもしれません。数年前、制作者の管理するコンピュータに突然入り込んできたそうです。ウイルスではない。未知のプログラム……」

案内人がミステリアスなBGMを流した。（正直、雰囲気壊れた）

「そのプログラムを、『^{セルヴオ}頭脳』と呼んでいます。そして、セルヴオを分析し、それをもとにつくられたのが、わたしです」

「でも、さっきはお前とは異質だって……」

案内人は自分をプログラムだと言った。でも、その『セルヴオ』はプログラムとは異質……。

「しよせん、真似てつくられただけの…… 出来そこないです」

「……………」

「どこが出来そこないなんだ？」

ヨックくんが怒ったような口調で言った。

「もし、制作者がそう言っているのなら、自分の力でお前以上のものをつくれるというのか？」

「吉野さん……」

え……？ 今、ヨックくんは案内人のために怒ったのか……？

案内人が質問してきた。

「キャラクターを『意思』というプログラムで複数動かすとして、個々を一つ一つの意思として活動させるのと、親となる意思プログラムに、全員を操作させるのと、どちらが効率的だと思います？」

どちらが、か……。難しいな。

おれはしばらく考えて答えた。

「個々に活動させる場合、コンピュータの容量がオーバーするだろうな。対して親となるものがすべてを操作すれば、一つの頭脳だけでいいわけだ。だが、それ自体が破壊されると、すべてが壊れる。理想的なのは前者だ」

「そういうことです。本来、プログラムというのは、コンピュータなしでは活動できないものです。すべては『親』となるコンピュータがすべてを動かします。しかしそのプログラムを実体化、個々の存在として活動できる世界を見つけたのです。でもプログラミングできる大きさにも限界がある。つまり、わたしは大きすぎるんですよ。セルヴオのように複数が『意思』として活動できないんです」

おれは案内人の説明の一節一節を、頭の中で分析するが、おれの頭のほうが情報量オーバーしてしまいそうだ。

……よくわからないけど、どうやってもプログラムはプログラムでしかないってこと……？

「セルヴオに関してはまだまだ不明な点が多いんですよ。どこからか入り込んでくる未知の『生物』。しかもそれは……、さつき確信したんですが、単純なプログラムに感染して、プログラムをセルヴオに改造してしまうんです」

あの占い師の件か。

「セルヴオは血を流すんでしょ？ それってまるで…… 人間……？」

言って、ヨツくんはつばを飲んだ。

そう、セルヴオの性質はまるで人間だ。

じゃあ、おれたちは？

「案内人、おれたちの、今のこの体って、なんなんだ？」

「安心してください。その体は人間です。そもそも、この世界はコンピュータの中、というよりも、そういう世界の中なんです。人間の構造がセルヴオに近い、なんていうのは考えがたいですが、この世界は人間を受け入れた」

「……………」

案内人の話は、おれたちにとって、とても興味深いものだった。プログラムもセルヴオも、そして人間も、本当は同じものなんじゃないのか？

案内人の話は終わった。

落ち着いた頃、ヨツくんが口を開いた。

「案内人……………」

「なんですか？」

「ぼくの今の考えでは、いますぐにでもぼくたちを、もとの世界にもどしたほうがいいと思う。ぼくが制作者なら、そうするよ」

「残念です。実際の制作者は、そんなにもあまくないですよ。最後までプレイさせて、セルヴオの研究を続行するそうです」

「……………」

冷たい風がふいた。

「魔王討伐か…………。でもどうやって情報を得ればいいんだ？」

キーパーソンとなる（と思われる）占い師も死んだし…………。

「しかたありませんね。わたしが案内します。次はこの町から東へ進んでください」

あつ、重要なことを思い出した。

「魔王を倒す『聖剣』とかはないの？」

「ありません」

あつそ……。だと思ったよ。

「それじゃあ、まずは武器の入手か」

おれが言つと、

「ぼくは持つてるよ」

ヨックくんがベルトから、金色のさやに収まった短剣を取り出した。

「屋敷から持ち出した」

「……………」

このボンボンが……！

武器があるなら墓地での戦いのときに出せよ！

ということは、武器がないのは、おれとエンドー――

「おれも持つてる」

エンドーが後ろに手をまわした。

……はいい？

エンドーちゃんも持つてるの……？

「これだ」

エンドーが“見覚えのあるハンマー”を取り出した。

ああ、それは間違いなく“見覚えがある”ぞ。

ヨックくんも目が横棒になっている。

これは、占い師の死体が握っていたハンマーじゃないか！

「どうかしたか？」

エンドーがなにくわぬ顔で、呆れて黙り込むおれたちに声をかける。

おれは咳払いをし、見えないマイクを口に当てる。

「業務連絡ー、業務連絡ー。エンドーくん、エンドーくん。今すぐ

それを返してきなさい！」

エア放送を入れるおれを、エンドーは驚いた顔で見た。「なぜ！？」と言いたいのだろう。

いや……、おかしいのはお前だし……。

ヨツくんも恐れるような目で、ハンマーを見ている。

「それ、一応遺品なんだけど……」

ヨツくんの言うとおりだ。遺品〃いわくアリ、だ！

「まー、いいじゃん？」

そう言つと、エンドーはそれを後ろにしまった。

ああ……、エンドーの変人ぶりが発揮されてきた……。それが本来のエンドー（こいつ）なのだけれど……。

つて、おれひとりだけノーウエポン？

ヨツくんとエンドーが、捨て犬を見るような目でおれを見る。（エンドーにだけはそんな目で見られたくない！）

おれはまわりを見回した。

「おい、そういえばエンドー、ナタ使つてたな。どこにやつたんだ？」

すると、二人に今度は、不審な眼差しを向けられた。

はいはい……。ナタなんかで攻撃するのは人道に反すると言いたいのだろ？（だからエンドーがおれをそんな目で見えるな！）

武器は現地調達することにしよう。

「じゃ、せめて薬とか買えないの？」

さすがにそれはあるだろう、と思い、案内人にたずねる。

「買えません。ていうか、プログラムの薬で、人間の傷は癒せませ

ん。ついでに言つと、お金もないですし、その他、数々のアイテム
もありません」

「……………」

断言しよう。

『これはRPGではない！』

08：暴走プログラム

さっそく町を出たおれたちは、次の町へ続くという、長い一本道を進んでいた。

さっきの町はデザイン以外、とくに見所なんてなかったし、やっぱりプログラムたちは怖い。

「モンスター出ないかなー」

ヨツくんがヒマそうに言う。

たしかにヒマだ。これをテレビゲーム化しても、誰もプレイしないだろうな。

そんな様子を見かねたのか、案内人が提案する。

「ヒマつぶしに、このゲームのストーリーを説明しましょうか？」

「おー、それがわからないと、なにがなにやら……」

ヨツくんが期待を込めて案内人に耳を傾けるが、期待はしないほうがいいと思うぞ。

「それでは——」

静かなBGMが流れる。心なし照明も少し暗くなったようだ。

（余計な演出だな）

「『世の中のすべてを恨む男がいた。男にはすべてが憎かった。人も、花も、木も、美しく舞うチヨウすらも……』」

「……けっこう考えてあるんだな」

感心、感心。

ゲーム性に似合わず、内容は濃いのかもしれない。でも、現代犯罪性を感じるのは気のせいかな？

「『男が欲したのは、偉大なる力。すべてを支配する力だった』」

「ふむふむ」

だんだんRPGらしくなってきたじゃないか。

他二人も、マジメモードだ。

「『男は黒魔術を勉強した。すべてを我がものにするため、強大な力を手に入れるため、男は必死だった。そして……、男は魔王となった』」

「……………」

努力は実となる。それが伝えたいのだろう。（ムリヤリそう思うことにした）

エンドーが不満そうな声を出す。

「でもよー、さっきの町もそうだけど、全然支配されてるっていう感じがしねーんだけど？」

たしかに、エンドーの言うとおりだ。臨場感がないんだよ、このゲーム。

「それは夢のお告げです。あなたたちは夢のお告げによって、魔王のたくらみを知り、それを阻止するために戦いを決意したのです」

「夢なんて見なかったけど？」

おれが言つと、

「面倒くさいから省略したそうです」

あー、駄作だ、このゲーム。

おれたちは一本道を進んだ。

妙な視線を感じるのは、案内人や制作者に見られているからだろ

うか？

いや、そうではなかった。

「グアウ！」

「誰だ？ 吠えたのは。エンドーかー？」

エンドーに言うと、足を蹴られた。

「じゃあ、ヨツくん？」

今度はゲンコツ。

「ぼくでもエンドーでもない」

ヨツくんが短剣を取り出した。

「グオア！」

「ガアウウ！」

「グルル……」

突然、おれたちの目の前に、木のこん棒を持った、二足歩行の牛のようなブタのようなモンスターが、三体現れた。

……なに？ 襲撃？ え、いきなり？

「この型のモンスターはRPGで、序盤からよく登場するやつだ。名前は、何種類があるが、一番一般的なのが――」

エンドーが解説してくれる。

ふむ、ムダな知識ばかりつけおって……。

「でも、普通にその名前を使っただけは面白くないから、オレが命名する。こいつは『デカブー』だ」

ビシッと、モンスターを指さすエンドー。

……ツツコミ入れるべきか？

「グオア！」

「ガアウウ！」

「グルル……」

ご親切に『デカブー』三体も……。

武器持ち相手に素手で戦えと？　アハハハハ……。

笑えねえ……。

「ゲームっぽくなってきたな」

と、おれ以外の（武器所持の）二人は喜んでいる。

「いきなりゲームっぽくされても困るぞ。とくにおれは！」

「いくぞお！」

「グオオアアア……！」

……やる気満々やな……。おれ以外。

またアザが増えそうだ。

さっそく『デカブー』の一体がおれに向かって突進してきた。そいつはおれよりも背が高い。つまりおれのほうが小回りがきくということだ。

おれはすばやく、デカブーの脇をすり抜け、背後をとった。

「グオオ!？」

「うらああ!!」

力いっぱい振った拳は、ビシッ!と、デカブーの背中を打った。

「……………」

「効果はないようだ。」

という文字が表示された気がした。

「グオア!」

ズガン!と大きな音をたてて、今度はこん棒がおれの足元の地面を打つ。

お強いすなあ…………。

なす術ナシ!

あとの二人も、少し離れたところで戦っている。

ここが現実の世界なら、戦い方はいくつでもあるのだけど。

石を投げたり、砂をかけたり…………。

だが、ここではそういう設定がされてないかぎり、それは不可能。

ここがもつと、リアリティーのある世界なら…………。

とか考えていても仕方がない。

デカブーが振り下ろしたこん棒を足場にして、今度は顔面に蹴りを入れる。

「オアアアッ!」

おっ、これは効いたか？

チャンスだ！

続けてこん棒を持つ腕――手首にかかと落としをする。

デカブーは短い悲鳴をあげて、こん棒を手から落とした。

顔面に何発かパンチを食らわし、敵が落としたこん棒に手を伸ばす。

「重っ……！」

その武器は、軽いと思いきや、ずっしりとしている。5キロ以上はあるだろう。

だが好都合！

おれはこん棒を両手で振り上げ、デカブーの頭めがけて振り下ろした。

「グガアアア！！！」

デカブーは倒れた。おれが勝ったのだ。

ほとんど同時に、ヨックンとエンドーのほうもけりが付いたらしい。

おれたちの勝ちだ。

「ふん。意外、弱かったな」

余裕の表情のエンドー。

おれたちはまともなケンカなんてやったことはない。やったとしても子供の頃の小さな争いくらいだ。

自分たちの力が想像以上のもので、みんな驚いているのだろう。

しかし、一人つかない声の案内人。

「みなさん……。聞いてください」

いい気分を壊されたおれたちは、無愛想に「どうした？」と返し

た。

「いえ…… 実は……。そのモンスターなんですけど……」

「……まさか、これも？」

おれの予感は的中した。

「そうです。それもおそらく、セルヴォです……。セルヴォが感染したプログラムです」

「やっぱり」

というのも、戦いの最中、なにか違和感があつた。そのときはそういう設定なのかと思つたが、リアルに痛みを感じているような悲鳴、触れた感触。

セルヴォは血を流し、痛みも感じるのだらう。おれたちと同じく。

「はっ！ みなさん！ この先の町へ急いでください！」

案内人が何か気付いたようだ。

おれたちは訊きかえすこともせず、言われるままに走つた。手に入れた武器が重い……。

息を切らせながら町に到着したおれたちの目の前では、惨劇が起つていた。

ここはさっきの町よりも数倍大きい。おれたちが立っている大通り、その向こうには小さく噴水が見える。両脇に建物が並ぶ道は、豊かな観光地を思わせる。

しかし、そのどこを見ても平和というものは微塵も感じられない。

逃げまどう住民たち。武器を持った様々なモンスターたちが、住民を襲っている。

さっきのモンスター『デカブー』のほかに、ゲームでよく見る、ネバネバした生物、それと二足歩行のオオカミのような生物。

「あれは、『ネーバ』と『ドッグ』だ」

エンドーは、早くも命名に飽きたようだ。

「ゲームらしくなってきたじゃ——」

「もうええ」

おれはヨツくんの喜びの声をさえぎって、案内人を呼んだ。

「やはり、こうなっていましたか……」

走ってきたおっさんが、『ドッグ』のナギナタの餌食となった。血を流し倒れるその光景は、まさに人殺し。

おれたちは建物の陰に身を隠した。

「まさか、あのセルヴォモンスターって、かなり危ない？」

ヨツくんがあたりまえのことを案内人に訊く。

セルヴォがセルヴォを殺す光景を見て、恐怖を感じたのだろう。

おれも怖い。

「当然です。あれらはもう、一つ一つの意思。こちらから制御がきかないうえ、あなたたちも殺されますよ」

「……………」

それを聞いてため息をつくおれたち。

なんだか、とんでもないことになってきた。

さっきまでの平和な気分が一気にぶち壊れた。

09：明らかな絶望もピンチという？

セルヴオがセルヴオを殺す……。
いったい何のために？

「まさかセルヴオの力がここまで強大とは、予測していませんでした……」

聞こえるのは、人型セルヴオの悲鳴と、モンスターセルヴオの咆哮。

案内人が独り言のように呟く。

「殺せないプログラムをセルヴオ化させ、殺す……。なぜ？」
おれも声をひそめる。

「とにかく、どうにかしないと……」
気付けば周りは静かになっていた。この辺の住民は全滅したようだ。

「どうしょ？」
ヨツくんがおれに訊く。

「知らん！ と言いたところだが、今はそんな無責任なことを言っている場合ではない。」

「んー……」
でもわからない。

様子をうかがっていたエンドーが口を挟む。

「おい、あれ見ろ」
そちらへ目をやる。モンスターが町の中心へ向かっている。
「なにかあるのかもしれないぞ」

エンドーが今にも、モンスターについて行きそうだ。
その前におれが言っておく。

「行ってみるか」

建物に隠れながら、モンスターに見つからないように静かに移動する。

そのとき、何かに足を掴まれた。

人だ。頭から血を流した男が、何かをうったえようとしている。

「大丈夫。心配ない」

男にそう言っていると、手を離して静かになった。

やはりセルヴオは……。

町の中心の噴水前に、モンスターが大勢整列している。

そして、噴水の噴出口に立ってそれを見下ろす影。

あれは…… えーっと……。

はみ出している記憶を引っ張り出していると、影がしゃべった。

「ふん、住民プログラムなんて中途半端なものを改造しても、何の意味もない」

あいつには見覚えがある。

「面白くない。ったく……」

あれがこのモンスターを率いているのか。

「案内人」

声を殺して案内人を呼ぶ。

「はい」

「あいつは……。あいつはあのか、墓場にいたゾンビじゃないか」
そうだ。あの特徴的な顔を忘れるはずがない。不良に混ざって現れ、すぐに消えた、あのかのゾンビだ。

……案内人？

「……ンテール……」

案内人の言葉は、おれたちにははつきり聞こえなかった。

「どうする？」

三人で相談。

「どうするって、おれたちはアレと戦うべきなのか？」

エンドーの声が微妙にふるえている。

「無理。死ぬ」

バトルに乗り気だったヨックくんが完全拒否。

当然だ。あの数のモンスターを相手に勝てるわけがない。（不良にすら勝てなかったし）

ん？ 不良？

「案内人、あのかの不良集団のときみたいに、全部デリートしてくれよ」

「……………」

反応ナシ！

「逃げたほうがいいと思うぞ」

と言うエンドーに賛成！

モンスターどもはおれたちの存在に気付いていないだろう。とりあえずこの場を脱し、案内人も含めて相談だ。

しかし、おれたちはよほどツイていないのか……。

「ん？ 臭うぞ……。誰だ？ ネズミを引きずり出せ！」

ゾンビがモンスターに指示を出した。

鼻の利くゾンビさんだこと……。

固まったおれは二人に質問する。

「誰か屁こいたか？」

首を振る二人。

「昨日食ったギョウザのせいかも……」

エンドーが口を押さえる。

ニンニクめ。

おれたちはあっけなく、モンスター集団の輪の中へ引きずり出された。

噴水に立って嬉しそうにおれたちを見下すゾンビ。

「ふふふ…… ターゲット捕獲」

アニメチックな顔だが、妙な威圧感がある。

おれたちは喋れなかった。

「墓地では危険を感じたので退避させてもらったが、こんどは逃がさないぞ」

危険を感じた……？ 案内人にデリートされることがわかっていたのか……？

何者なんだ？ このゾンビ野郎。

「なんで……、住民たちを殺した？」

ようやく口を開いたのはエンドー。

その疑問は今はどうでもいいだろ。と言いたいが、実際気にならないと言えば嘘になる。

「役に立たないからだ。それに邪魔だからな。ふふふふ……」
なるほど。こいつは本当の悪キヤラというわけだ。

ゾンビは顔をニヤつかせたまま続ける。

「単純すぎる住民プログラムなんか改造しても、何のメリットもないことがわかった。それにくらべ、最初から戦闘命令を組み込まれたモンスターは、改造すれば十分に役に立つ」

そうか、このモンスターどももプログラムだったやつらか。ということは、このゾンビがプログラムのセルヴオ化を引き起こしている……。

ゾンビは気味悪く笑った。

「単純すぎるプログラムは、改造してやっても、たいして知能を得ることはできない」

利用価値がないから殺す……。

あの占い師を殺したのも、こいつか。

そう考えると、怒りが湧き上がってきた。

少なくとも占い師は、殺されまいと武器を持って抵抗した。つまり、死にたくなかったと。

べつに他人のために怒るなんて、おれはしない。

ただ、こいつの邪悪な心が許せないんだ。

でも、（ヨツくんじゃないが）ゲームらしくなってきたじゃないか。

皮肉なもんだ。

最後にゾンビは、おれたちをにらみ、言った。

「お前たちを倒し、おれは完全となる」

さつきから、このゾンビ野郎の一言一言は謎が多い。

「どういうことなんだ？」

この状況に慣れたのか、ただ単に切り替えが早いだけなのか、エ
ンドーが積極的に質問する。

「知らなくてもいいことだ。おれは忙しいんでな」

そして指を突きつけ――

「消えろ」

モンスターたちがいつせいに飛びかかってきた。
おれは重い武器を構え、

防ぐ 防ぐ 防ぐ……。

「ぐおお……！」

反撃できない……！ やべっ！

受ける 受ける 受け……。

『マハエ HP：0』

『ヨシノ HP：0』

『エンドー HP：0』

くっ…… そお……。

自分の倒れる音も聞こえなかった。

すべて終わった……。

「ふふふ…… もろいな、もろすぎるぞ。こつも簡単に終わるとは……」

「……」
「……」
「……」

「ザコはザコか。捨てておけ」

ゾンビはモンスターに指示を出し、消えた。

おれの意識は闇に吸い込まれるように――

人物データ＜遠藤京助＞

人物データ＜遠藤京助＞

【案内人】「遠藤さん。データ作成に協力願います！」

【遠藤】「いやだね」

【案内人】「……………」

【案内人】「……それでは、いくつか質問に答えてもらいます」

【遠藤】「おい！」

【案内人】「データ収集です。強制協力です」

【遠藤】「めんどくせー……………」

【案内人】「それでは質問を始めます」

【遠藤】「はいはい」

【案内人】「名前は『遠藤京助』えんていけいすけ。年齢は『16歳』。そうですね？」

【遠藤】「ふっ…………… とうかな？」

【案内人】「今更しらばくれてどうするんですか」

【遠藤】「ふふ〜ん」

【案内人】「次の質問。「身長と体重は？」」

【遠藤】「セクハラ」

【案内人】「だまれ」

【遠藤】「！」

【案内人】「「身長と体重は？」」

【遠藤】「……身長は『170』。体重は『50』と、ちょっとじゃないか？」

【案内人】「わたしに訊かないでくださいよ。まあいいでしょう。『ガリ』っと」

【遠藤】「ガリってなんじゃあー!？」

【案内人】「では、「何月生まれですか?」「血液型も教えてください」さい」

【遠藤】「……『9月18日』、『AB』」

【案内人】「好きなものは？」

【遠藤】「たくさんあるぞ。『菓子』『ゲーム』『マンガ』『小

説『昼寝』――」

【案内人】「はい、オーケーです」

【遠藤】「まだまだあるのに……」

【案内人】「ところで、なぜあなたは養護施設に？」

【遠藤】「いろいろと事情があるんだよ。育児放棄され、追い出され、さまよい歩き――」

【案内人】「な、なるほど！（汗）」

【遠藤】「幼かったおれは路頭に迷い、変な人たちに連れ去られそうになり、警察に逃げ込めば――」

【案内人】「ありがとうございますあ！（汗）」

< 遠藤京助 詳細データ >

- ・ 名前 : エンドウ キョウスケ
- ・ 呼び名 : エンドー
- ・ 身長 : 170センチ
- ・ 体重 : ガリ
- ・ 誕生日 : 9月18日
- ・ 血液型 : AB型

10：勇者の力 それから意思

目を覚ましたおれは―― 目を開けたおれたちは『灰白の世界』にいた。

灰白色の世界の中で、直径六メートルほどの、謎の文字が刻まれた石の円盤を囲むように、おれ、エンドー、ヨックン。何かのゲームの『賢者の間』を思い出す。

「ここはどこだ？ みんな無事か!？」

「ぼくは…… 死んだのかな？」

「おい、ヨックン！ マハエ！ どうなってるんだ!？」

おれたちの声が何重にも反響する。

ここはどこなんだ!？

「――人間たちよ……」

心に響く声とともに、円の中心に青白い光が現れた。

「誰だ……」

女のような、優しさを感じる声だ。

耳から聞こえるのではなく、直接頭の中に吹き込まれるような……。

「——あなたたちは世界を救えますか？」

……は？

「——世界を、救ってくれますか？」

「……」

「……」

「……」

なにを言うんだ？ 誰なんだ？ おれたちになにをどうしろと？
突然のことにおれは混乱した。
そうだろ？ いきなり名のりもせず、世界を救えるか？ だ。
説明してもらわないと答えられるはずがない。

「——救ってくれますか？」

その声は、なおもおれたちに問い続ける。
おれたちはどうすればいいんだ？

少しの沈黙。

さまざまな考えがめぐる。

答えるべきなのか？

……なにを？

「救おう」

まっさきにエンドーが答えた。
エンドーお前……、この問いの意味がわかって——

「ぼくも、救おう」

こんどはヨッくん。

「……………」

わからない。この二人はなにを考えているんだ？

長い間ともに暮らしてきたおれでも、二人の、この心理は理解できない。

この問いの意味……。おれにはわからない。

「……………」

“世界を救ってくれますか？”

だが、なぜか、本能的な何かがおれの心を動かす。

今、おれの前に、道は一本しかないのだ。

おれはため息をついて頭をかいた。

……まったく、おれの周りには変人ばかりだな。

でもおれは――

「救おう……………」

——こいつらとおれは、断ち切れない鎖でつながっているんだ。

「救ってやるよ!」

おれが言っと、とたんに光が増大し『灰白の世界』を青白い光で埋めつくした。

「——ありがとう……」

矢のようにうち上げられた光が、三つに分かれ、おれたちの胸に突き刺さった。

「……………」

これは力の塊？

不思議な感覚だ。体中を何かがかけめぐり、苦痛を消し去る。

「——その力は、あなたたちの助けとなります。しかし、けっして死を打ち消すものではありません。あなたたちの力を信じます。どうか、わたしの過ちを——」

「マハエさん！ 吉野さん！ 遠藤さん！」

薄れゆく光の中で、案内人の呼ぶ声が聞こえた。現実を引き戻すように、その声に引つ張られる。

おれたちは生きている！

世界を包む光が消えたとき、おれたちはさっきの噴水前に立っていた。

モンスターどもが、驚いた表情で復活したおれたちを見る。

すごいパワーだ。

モンスターの集団を前にしても恐怖を感じない。
おまけに体の傷も完全に癒えている。

「グウー…… ガアウ！」

武器を片手に飛びかかるモンスターの一。

おれは本能のままに新しい感覚—— 力を集中させた。

「うらあっ！」

地面を踏みしめ、溜めた力を一気に放つ！

ゴゴオオオオツ！！！！

おれの足元から強い衝撃波が放たれ、地面を広がり、周りのモンスターをなぎ倒す！

「今だ！」

おれは叫んで、倒れたモンスターを踏みつけ、集団の外を目指す。

「グオオオオアウ！！！！」

駄目だ、数が多い！ 後方のモンスターを倒すほどに力は及んでいなかった。

「ぼくに任せろ！」

ヨツくんの眼が銀色に光った。

キーーーーン……

力が超音波のように空気を振動させた。

その波は前方のモンスター集団をつき抜ける

時が止まったような気がした。

だが、止まったのはおれたちではない。

ヨックんの力に貫かれた前方のモンスターが、金縛りにあつたように動きを止めたのだ。

おれたちは、動かなくなったモンスター集団の中を、縫うように駆け抜ける。

後ろから動けるモンスターが追ってくる。

逃げ切つてやる！

つと、その前に……。

おれは、近くで停止している、オオカミの持っている『ナギナタ』を、その手から奪った。

こん棒じゃ、重すぎて疲れるからな。

全力で走って、追手たちと数十メートルほど距離が開いたが、とても逃げ切る体力はない。

これじゃ、すぐに追いつかれる！

そのとき、エンドーが急ブレーキをかけて、振り返った。

「どうした！？ 早く！」

おれの呼びかけにエンドーは反応せず、呼吸をととのえている。モンスターが迫る。

停止していたモンスターも動き出した。
もう20メートル前方まで――

「最後はおれに任せとけ」

エンドーが腕を前に構え、低くうなった。力を集中させているのだ。

そして、前方に力を飛ばすように、腕を横に振った。

カツ！と強い光。

そして――

ドゴオオオン！！！！

まるで地雷を踏んだように、追手の先頭から大爆発が起こった。普通の爆弾の爆発とは違う、強い力が破裂したような爆発だ。すげえ……。

白い爆風は広範囲に広がり、ほとんどのモンスターを巻き込んだ。

オオオオオ……

爆音が止んだ。

「なんて威力だ……」

おれはあ然とする。

ヨツくんもその威力に驚いている。発動させたエンドー自身も。案内人が恐れるように言う。

「あなたたち…… いったい……」

おれたちの身に起こったことを、案内人は知らないのだろう。

「グルルル……」

半分ほどモンスターが吹き飛んだものの、すべてが滅されたわけではなかった。

被害をまぬがれたモンスターや、巻き込まれてもダメージが少なかったモンスター。

だが、どいつも再び襲ってこない。おれたちの力を警戒しているのだ。

あれがプログラムのままのモンスターだったら、どうだろう？

力を恐れるだろうか？

死を恐れるだろうか？

単純につくられたプログラムは、命令どおりに動くだろう。

しかし、セルヴォたちは死にたくないという自分の意思を持っている。

案内人の話—— プログラムとセルヴォの違い。

案内人には悪いが、やはりまったく別なものなのだ。

不要な戦いはしない。

先へ進もう。

あのゾンビ野郎をぶっ飛ばす！

11：敵の名は……

町から逃れ、おれたちは町外れの川原で休憩をすることにした。流れの速い大きな川だ。でも、やはり自然に感じられる涼しさや、安らぎなどの現実味はない。

「あなたたちの、あの力は何なんです!？」

「わめくな〜! 疲れてんだからっ……!」

エンドーが息を切らせて、石に腰を下ろした。

おれとヨツくんも、近くの手ごろな石に座る。

「ふう……」

あの技を使うと、妙に疲れる。

空腹時に力が入らない感じ。気力が削られたようだ。

これが、ゲームでいう『魔力』だろうか？

休憩すると、疲れは和らいで、力ももどってきた。

「なにがあつたんですか？」

おれたちが元気になったのを確認した案内人が、質問を再開した。

ヨツくんが、うーん、と考えながら言う。

「あれは、なんだろう?」

おれも腕を組む。

「なんだろうな?」

今考えると、とても不思議な出来事だった。

『世界を救ってくれ……』『わたしの過ちを……』

「世界って、何のことだろうか？ このゲーム世界？」

おれが言っと、二人もそれについて考えていたのか、

「ぼくらがいるこの世界は、制作者がつくったんだよね？ 案内人？」

「ですから、あくまでこのプログラムを―― です。前にも言いましたが、この、プログラムの実体化を可能にする世界は、偶然見つけたものなのです」

「それだ。それもわからん」

エンドーが、人差し指を前に振りながら言う。

「この世界のことだ。なぜ、この世界はある？ 誰がつくった世界だ？」

「……さっぱりです」

案内人もお手上げのようだ。

会話が途切れても、川の音だけは絶えず聞こえてくる。

ほんとに、この世界ってなに？

おれたちは、自分たちの身に起こったことを、こと細かく案内人に話した。

灰白の間、青白い光、謎の声、世界を救ってくれと頼まれたこと。それと、さっきの力。

「あなたたちに、何かの力が宿った、ということですね」

「ああ、すごい力だ」

自分の右手を見つめるエンドー。

そういえばエンドーの技が一番すさまじかった。あの大量のモンスター、戦意を喪失させたのは、最後のエンドーの大技のおかげなんだ。

……エンドーからは、怒りを買わないようにしよう……。

さて、さっきの技のおさらいだ。

まず、おれの技。あれは足元から強い衝撃波を放ち、周囲の敵を吹っ飛ばす。自分と密着している者には被害はない。

次にヨツくんの技。あの技は、よくわからなかったが、敵の動きを止めるものらしい。使った本人が言うには、この技の使い方はそれだけではないかもしれない、と。

そして、エンドーの技。あれはつまり、人間爆弾製造機だな。でも、爆弾の爆発とは違っていた。凝縮された大きな力を、破裂させたような……。

エンドーがにやけて言う。

「ちなみに技名は、カメハ——」

「さ、進むか。はやくあのゾンビ野郎を滅さないと、被害は増えるぞ」

おれは伸びをしながら立ち上がった。

すると、案内人が、

「いえ、待ってください。わたしからも話があります。その、ゾンビについて」

「ほう、何かわかったのか？」

もう一度石に座りなおす。

「はい。さっき、噴水のところで思い出して、調べてたんですが……」

あるとき、案内人が応答しなかったのは、そのせいか。

「あのゾンビ。名を『デンテール』といいます」

「デンテール？」

おれがくり返すと、案内人は詳しい話を始めた。

「デンテールとは、削除されたはずのキャラプログラムです。もともと、最終ボスとしてつくられたプログラムでしたが、重大な設定ミスがあり、削除したのです。重大なミスというのは、『執念』」

「執念……？ 何に対する？」

と、訊くと、少し悩んで案内人は答えた。

「何、と言われても困りますが、ボスキャラは他のキャラクターよりも、知能は高くできています。その中に『執念』というプログラムも追加したそうで、しかし、その程度がいき過ぎていて、やむなく、一からつくりなおすため、『デンテール』というキャラクターは削除されたんです」

削除されたプログラムが、セルヴオとなって、暴走したのか……。

「調べものが終わって、もどって見たら、あなたたちがモンスターにやられていたのでビックリしました」

「うん、一度死んだんだなー。ぼくたち」

ヨツくんが笑いながら話す。

いやー、でもほんと、復活できてよかった。ハハハー。

「と、なると……。おれたちは、そのデテールを倒さなきゃいけないんだな？ そいつの居場所はわかってんのか？」

めんどくさい。と言いたげな、エンドーの憂鬱そうな声。

「『デテール』ではなく、『デンテール』です」

案内人が律儀に訂正してから言った。（たぶん、わざと間違えたぞ）

「いるとしたら、やはり『魔城』でしょうね……」

魔城……。それはおれたちが最初に目指していた場所だ。

デンテールが削除されたボスキャラということは、もう一人、本物のボスキャラがいるのだろう。

までよ……？ 魔城にデンテールがいるとしたら、もうそこは……。

「ぼくの予想では、魔城もデンテールに占拠されている」

ヨツくんの考えも、おれと同じだったようだ。

一筋縄ではいかないよな……。

おれとヨツくんが困った表情をする中、エンドーが、ポンと手を打った。

「“デイトール”は、おれたちが死んだと思ってるはずだ。その不意を突けばいいんじゃない？」

どうでもいいけど、そのネタはもういいって……。 （でも案内人は再び律儀に訂正している）

それに――

「もしも、おれたちが生きていることが、やつにバレてたらどうする？」

そう言うのと、エンドーではなく、案内人が、

「その作戦にかけてみてもいいのではないですか？ どちらにしても、魔城へ行くことは決まっていますから、もしも気付かれていなければ、万々歳です」

……んな他人事みたいに言うなよ……。 他人事だけど。

ま、エンドーと案内人が同盟を結んだのなら、おれは―― ヨツくんも、ただ引きずられていくだけだろう。二人とも（エンドー＆案内人）強引な性格だから。

とか考えていると……。

「それなら、ぼくもエンドー派で」

ん。これでおれ一人引きずられるな。 うん。

……泣けるゲームだ……。

いざ、魔城へ――

……どうやって？　ていうか、どこにあるの？

「魔城は、この川の下流にあります」

おれたちは川を見た。

流れが速く、深い川だ。川幅も広いし、ところどころで渦が発生している。

川以外に行く道はないのかと訊くと、
「そこに『イカダ』が用意されていますので、それで川を下ってください」

簡単に言う案内人は残酷だ。

たしかに、岸に『イカダ』が用意されているが……。『イカダ』
だと？　そんなもので下れるわけあるかあ！　ゴムボートのほうが、
かえって安心するわ！

「そんな心配そんな顔をしなくても、すぐに着きますよ。大丈夫ですって！　揺れすぎて“船酔い”どころじゃないですから」

「……………」

案内人が的外れな部分を励ましてくる。
問題は船酔いなんかじゃないぞー！

「なんだー、船酔いしねーのかー。安心したー」

エンドーがさくさくと、船出の準備を始める。

…… おおっとあ、これは予想外。

まさかエンドーが船に弱かったとは……。じゃなくて、えっと……どこを突っ込めばいいんだっけ？

とりあえず、そういう自分にツッコミをいれる。

「行くしかないでしょ」

ヨツくんはヨツくんで、すでにあきらめモード。イコール、おれも強制あきらめモード。

おれとヨツくんは、並んでエンドーを見ていた。

「神よ。どうか、ぼくたちをお見守りください。アーメン」

「キミはいつからキリスト教徒になったんだい？」

「真栄くんもクリスマスパーティーでは楽しむだろ？」

「おれは無宗教だ」

「奇遇だね。ぼくもだよ」

話がかみ合わない……。

そして、出航準備完了。

12：絶叫！警戒！疑問？

『イカダ』の広さは、三人乗っても少しスペースが残るくらい。しかし、それはやはりイカダ。丸太をヒモで組んで、真ん中に、ぼろぼろの布でできた帆が立てられている。

沈みそうだなあ！。

おれは縮こまって、マストにしがみつく。（持っているナギナタが邪魔だ）

「出発！」

元気がいいのはエンドーだけ。

さっきまで、めんどくさそうな顔をしていたのに……。

ヨックくんが短剣で、イカダを岸につなぎ止めているロープを切断した。

ゆっくりと流されるイカダ。

その速度はしだいに速くなり……。

「おおおおおおあああああ……！！！！」

絶叫するおれ。

「うほほほほほほほほほほ……！！」

喜ぶエンドー。

「守りたまえ救いたまえ導きたまえ……」

神に祈るヨックくん。

死ぬ……。

イカダは、しばらく暴走したように流されたあと、徐々に速度を落としていった。

流れの遅い場所に到達したようだ。

おれはしがみついていたマストから手を離して、おそろおそろ立ち上がった。

「助かった……」

脱力するおれ。

「もう終わりか？」

残念そうなエンドー。

「神よ……。感謝します」

神に礼を言うヨツくん。

おれはエンドーに訊く。

「なんで、そんなに楽しめるんだよ？」

エンドーは首をひねって答えた。

「なんでって、安全に進めるようにプログラムされてんだろ？ このイカダ」

それを聞いたおれは、さらに脱力。

本気でそう思っているこいつは幸せ者だ……。このゲームをつくった制作者だぞ？ そこまでおれたたちのことを考えているわけないだろ。

エンドーに説明するのもめんどうなので、とりあえずため息をついておいた。

おれたちの乗ったイカダは、流れの穏やかな川を、ロープで引っ張られるように、まっすぐ下流へ進む。

両側は森らしく、木が生い茂っている。（森の中を流れる川だ）

テレビのアマゾン川を思い出して、とっさに警戒モード。

もしも、巨大なヘビが出てきたら……。

いかなる危機にもすばやく対処できるよう、つねに神経をときすませておく――

「いやー、気持ちいいし、空気がおいしー!」

「なにを言っているんだい、エンドーくん。実際に森の中にいるわけじゃないんだよ」

「ふ……。現実主義だな、ヨツくんは。いい大人になれねーよ?」

――のは、おれだけのようだ……。

十五分ほど経過したとき、案内人が告げた。

「もうすぐ魔城に着きますよ」

おれたちはイカダが進んでいく、下流へ目をやる。

先のほうに島のようなものが小さく見える。そこに魔城がある、と、案内人は言う。

よく見ると、この川は先で二股に分かれるようだ。そして、その中心にそびえる崖。

あそこに魔城の入り口が?

「あそこはもう、乗っ取られているでしょう……。もしかしたら、見張りがいるかもしれません」

「見張りに見つかったら厄介だな。デンテールに知られてしまう」
エンドーが『デンテール』の部分を強調して言った。
学習したな。

さて、見張りがいたらどうする？　ここからじゃ遠すぎて見える
わけがない。確認できるまで近づいたら、こちらの存在も気付かれ
てしまう。

「……よし、ここはぼくが」

ヨツくんがイカダの先端に立った。

キーーーーン……。

あのときの、空気が振動する鋭い音。

『魔力』を使っているようだ。

でも、なにを？　ヨツくんの力の、別の使い方ってやつか？

しばらく魔城のほうへ眼を光らせた後、疲れたと言うように、目
を押さえておれたちに向いた。

「どこにも見張りはいない。このまま進むと、洞窟があるから、そ
こから入るんだろう」

自信を持って言うヨツくんに、案内人の驚いた声。

「見えるんですか！？　吉野さん！」

「うん。これがこの力の別の使い道。いろんなものが見えるよ」
いろいろなもの……？

おれやエンドーの力にも、別の使い道があるのだろうか？

四階建ての建物ほどの高さの崖。

ヨツくんが言ったとおり、その崖の下に洞窟があった。それに見張りも確認できない。

洞窟——魔城の入り口は、すんなりとおれたちの侵入を許してくれた。

暗い洞窟に入ったイカダは、奥の岸まで流れると、コトン……、と音をたてて停止した。

おれはイカダから降りると、こわばった腰をひねった。

「うー……。やっと着いたなあ」

エンドーとヨツくんも、降りて伸びをしている。

どこへ行くのかと、闇に目を凝らすと、石の階段を見つけた。おれたちは足元に気をつけながら、慎重に一段一段のぼっていった。

らせん状になった狭い階段を、誰も声を出さず、できるだけ音を消して上へ進む。

耳を澄ませながら——上から岩が転がってきてても、すぐに下へ逃げられるように。

アドベンチャー映画の影響か、ついつい危険な想像をしてしまう。だが、この世界ではその可能性は高い。

今転がってくる。あと一段踏んだら転がってくる……。

「……………」
「……………」
「……………」

思い過ごしか。

外の光が見えた。

おれたちの顔に、自然と笑みが浮かぶ。

緑の広場――

「はあっ……」

息苦しい階段をやっと抜け、外の空気を胸一杯に吸い込む。
いちいち寿命が縮む！

しかし、魔城だから、もっとトラップがあるものかと思ったが
……。

そこは草原のように、緑の草がぎっしり生えた広場。

眺めのいい高台だ。森と、その中を、まっすぐに伸びる川。イカ
ダで下ってきた川だ。ここはあの崖の上なのだろう。

「この土地、買いだね」

ヨツくんがおっさんみたいな発言をする。

住みたいのか？ この世界に？

おれは鼻を鳴らし、反対側を見た。

白いレンガの壁が、横にまっすぐ広がっている。

すでにエンドーが、鉄の扉がある門の付近を探索している。（こ
の絶景に見向きもしないとは……）

おれはヨツくんの腕を引いて門の前へ。

立て看板に【魔城 正門】と書いてある。
なんとご親切な……。

「何かあったか？」

訊くと、エンドーは門の鉄扉を見ながら腕を組んだ。

「ここ以外に侵入口はないようだ」

……いや、ここ以外、どこから入ろうと思ったんだ？

そう言うと、

「あのなあ。正門から中に入っているのは、住人が、客が、引越し屋だけだ」

常識だろ！　と言わんばかりの態度。

おれたちは、住人でも客でも引越し屋でもないってわけね。侵入者だから。

でも、ここからしか入れないのは事実。

市販のゲームでは、主人公が敵の住処に、正門から堂々と侵入するっけ？

とか考えていると、エンドーが鉄扉に手をかけていた。

「ちよっ——　エンド——」

手を伸ばして、エンドーを止めようとしたが遅かった……、が……。

ガチャン……。

「カギがかかっている。」

カクツ、と勢いでコケかけるおれとヨックん。

「なんだー。カギがかかってんのなー」

エンドーが腰に手を当てて、舌打ちをする。

いきなり開けようとするな！　もうちよつと警戒心を持て！

こいつを独りで行動させるのは危険だな。一緒に行動するのも危険だが……。

その様子を見た案内人は。

「おかしいですね……。簡単に開くようになってはいるはんですが……」

それはそれで制作者に文句を言いたくなるよ。

「まあいい。こういうときはだな」

エンドーが拳をコキコキツつと鳴らす。

お、あの技を使う気か？

鳴らした拳を持ち上げ……。開き……。口のところでメガホンのように構える。

「ちわゝ！ 宅配屋でつすゝ！ 開けてくださゝい！」

「開くかアホ！……！」

おれとヨツくんのダブルツツコミがさく裂！

客でも引越し屋でもなく、宅配屋さん！？

そんなことで開くわけが――

ギギギギギギ……。ゴトン……。

……。開いた。

「ほら見る。ちゃんと開けてくれた」

あつけにとられるおれたちの横で、エンドーが得意げに言う。

でも、エンドーの言葉で開いたと言うよりは、おれたちを招き入れるために開いたような……。出迎えもないし……。

それに、なんか変だぞ。

扉の向こうの空間が波打ったように見えたのは、おれだけか？

13：更に異な世界

正門から中に侵入すると、後ろで勝手にドアが閉まった。
だが、そこは城ではなかった。

遠くに、高くそびえる城が見える。ここはまだ、『庭』といったところだろうか？

入ったとたんに、空気が変わった。

冷たい風が頬をなで、やわらかい芝がそよぐ。草のいい香りだ。
空には、流れる雲、ぎらぎらと暖かく輝く太陽……。

「……リアルだな」

おれは、さつきと変わったその世界の、隅々を見回す。

さつきまでのリアリティーの無さが、みじんも見られない。

手で触った植物の感触。肌に触れる風の感触。すべてが現実世界と変わらない。

これは、さつきまでのゲーム世界とはまったく違う。

手抜きなしのプログラミング？ いや、プログラミングできる限界は超えているだろう。

ここは現実世界？

観察するおれたちに、案内人が言う。

「わたしはその世界を体験できませんが……。どうやらそこは、さつきまでの世界とは違うようです」

意外と案内人は冷静だ。しかし、違う世界というのはどういうことだろう？

そう訊くと。

「簡単に言えば、その世界そのものがセルヴオのようなものでしょ

う

「……………」

おれたちは何も反応できなかった。
複雑なことはわからないが、ここは、限りなく現実に近い世界なのかも。

「デンテールか……………」

おれは遠くに見える城を眺めた。

あのゾンビに、そこまでの力が……………？

「あなたたちは先へ進んでください。城へ——　ボスがいる、塔の頂上へ」

ボスが二人か……………。まいったな。

すべてが現実世界のように、さっきと違って動きやすい。
なんととっても、気持ちがいい。

少し進むと、白い壁の、四角い小さな建物があった。
両脇を高い柵にはばまれていて、この建物の中を通らないと先に進めそうにない。

「畏だな」

「畏だ」

「畏だね」

またも、おれたちの意見は一致。
畏だとわかっていて、入る悲しさ……………。

おれは考えるふりをして、不意に振りかぶった。
それに二人も反応する。

「じゃんけん——！」

やつらは前回の勝負で、おれに対してパーを出すクセがついてい
るはずだ！

「ホイ！」

——おれは先頭に立って、建物のドアノブをまわした。

「……………」

「おれたちは準備オーケーだぞ。早く開けろー、一人負け」

「……………」

なぜおれは負けたのだ……？

やつらは『パー』を出すと思って、おれは『チョキ』を出したの
に……。

勝ち組二名は、おれの後ろで武器を構えている。

カチャ……。

おれはゆつくりとドアを開けた。

石床の小屋。だが、家具や雑貨などは何も置かれていない。

まっすぐ奥にある、出口のドアを守るように、こん棒を持った四
体のブタ——『デカブー（エンドー命名）』がいる。

「おーおー、ブタ小屋かここは？」

エンドーが、中に入るなり敵を挑発する。

デカブーも、おれたちを見て、手に持ったこん棒を振り上げ、

「ナンダ、デメエラは……」

低い声でしゃべった。

「へー、モンスターもしゃべるんだな」

おれがつぶやくと、案内人が言う。

「もともとプログラムですからね。しゃべるように改造するのは簡単なのでしょーう」

ふむ……。それは便利だな。

「ナにモノダ……？」

おれたちをにらむ四体のデカブーに、エンドーが言い放つ。

「侵入者だ」

そしてエンドーは腕を前に構える。

それを、おれとヨツくんが慌てて制止する。

「バカ！ こんなせまい空間でお前の力は使っうな！」

おれの言葉に、エンドーは少し考えて、苦笑い。

やっぱりこいつ、危ない……。

「グオオオ！ コロす！」

危ないエンドーのせいで、おれたちは危ない状況に陥ったわけ……。

「ぼくがやる」

ヨツくんが、勇ましくおれの前に立った。

おお！ 力を持ったヨツくんはなんとも頼もしい！

「こいつらの動きを止めたら、向こうのドアへ走るぞ！」

叫ぶヨツくんの頼もしい背中中、おれとエンドーはうなずく。

魔力を眼に集中させるヨツくん。

銀色の眼の光と、あの鋭い音。再びデカブーが、吠えようと口を開いたとき、そのまま動きを止めた。

よし！ 走れ――

「あれ……？」

走り出そうとしたおれは、ヨッくんの抜けた声で踏み止まった。

「どうした！？」

見ると、ヨッくんは敵のほうを見て、首をひねっている。

「グオオオ！」

停止したはずのデカブーの咆哮。

いや、停止したのは一体だけだ。他の三体は動いている。

どういうことだ？ あのとときは、十数匹のモンスターを一度に停止させたのに……。集中力が足りなかった？

いつの間にか、ヨッくんはおれの後ろに隠れていた。

頼りねえ……。……。

停止している他に三体いるから、一人一体と闘うことになるんだぞ！

攻撃を切り抜けながら、出口へ走るか……。

「戦闘開始」

まずは敵の出方をうかがう。

猪突盲進。いきなり突っ込んでくる。しかし、ナリがでかいので、かわすのは容易だ。

敵のこん棒が、おれの左でゴツン！と、石の床を叩いた。

次は、おれの攻撃。

おれはナギナタを上にも構えた。

……。あつ。やばい。狭い室内で柄の長いナギナタは、非常に不利

だ。

「……すいません。話し合いで解決しませんか？」

「グオア！」

無理なようだ。

左横からこん棒が襲ってきた。

横からの攻撃は対処に困る。左腕で防ぐのが精一杯で、おれは右側になぎ倒された。

「大丈夫か！」

ヨツくんがおれを心配してくれるが、本人も危うい状態だ。腹を殴られるのが目に入った。

おれは左腕の痛みをこらえて、出口へ走る。

とりあえず出口を開けておかなければ！

ヨツくんの力が持続し、停止したままのデカブーを無視して、出口のドアに飛びついた。

ガシャツ！という音が、おれを凍りつかせる。

……カギ、がかかってますね。

「グゴオオオ！」

ここで、停止していたデカブーが復活。背後のおれを見つけると、重たい武器を振り下ろした。

しかし、フリが大きいので、やはり容易にかわせる。

ズゴオオン！

そして―― 敵の怪力と合わさって、破壊力抜群のこん棒は、力

ギのかかったドアをぶち壊してくれた。

おお！ ナイスだブタさん！

デカブーは、「やっちまった」と、顔をゆがめる。

優しいおれは、ぽんぽんと、肩を叩いてなぐさめてやる。（当然、怒りを買ったけど）

攻撃を受けた左腕が痛む。

ヨツくんとエンドーも、大苦戦の模様。そして、命からがらおれのほうへ逃れてきた。

「ヤベエな。ムチャクチャ戦いづらい！」

エンドーが傷の痛みにうなりながら言う。

ヨツくんは無言で腹を押さえている。

逃げないと……。

おれは二人に、もっと固まるように言うと、足に魔力を集中させた。

あの時と同じように―― 力を出し切るイメージで――

「くらえ！」

床を踏みしめ、力を放つ！

おれたちを中心に、衝撃波が周囲に広がる。

だが、今回は何か違った。力を出し切った感じがしない。

放たれた衝撃波は、小さい威力ながらも、デカブー四体を転倒させるには十分だった。

「よし！ 行くぞ！」

おれは怪我にうめく二人を押して、ブタ小屋から脱出。敵が起き上がるまでに、小屋から距離をとった。

「くっそ！ あいつらぁ……！ ブタ小屋ごとぶっ潰してやる！」
怒ったエンドーは、腕を構えて、低くうなった。

目を凝らすと、腕にうつすらと、オーラのように魔力が見える。
それが腕全体から、手の平に溜まっていく。そして、小さな、球体となった。

おれたちを追って、小屋からデカブーが出てくる。

エンドーは腕を振って、球体を敵へ飛ばした。

あの威力なら、小さな建物くらい一発で崩壊するだろう。
と、思ったが……。

ドオンッ！

球体は先に出てきたデカブーの寸前で破裂。小さな爆発で、後ろに仰け反り、倒れた。

あれ？ しょぼくなってる。

エンドーの表情が固まる。

どういうことだ？

14：地獄しかないようだ。

なぜ、力が弱まっている？

追いかけてくる三体の『デカブー』から逃走しながら、考えた。
ブタ小屋から城の方向へ走って、途中で階段を登った。

「つまり、こういうことじゃないかな？」

階段を上りきったところで、デカブーをまいたのを確認し、ホツとしたとき、ヨツくんが言った。

「あの強力な技は、いつでも使えるわけではなくて、普段は力の消費を自動的に抑えているんじゃない？」

ああ、それはオレも薄々気付いていた。

使うとき、力を出し過ぎないように強制的に抑えこまれる感じだった。

でもま、やたらと疲れるから乱用するつもりはなかったが。

「いいじゃん？ 大群相手じゃなければ、これでも十分戦えるし、連発もできる」

エンドーがおれたちを—— というより、自分を励ますように言った。

こいつの言うとおりでもあるな。ま、今は進むしかない。

「しかし、デンテールがまた、あのときのような軍勢を用意しているかもしれない」

「……………」

……進むしかない！

階段を上ったここは、コンクリートの床。

そして、これまた罠の臭いでいっぱい—— 下へ降りるための

孔が用意されている。ハシゴまでも……。

「……………」

心なしか、ヨツくんとエンドーの視線を感じる。
はいはい……。先に行きますよ。行けばいいんですよ。

すでにあきらめモードのおれは、二人——と、案内人の応援を
聞き流しながら、ハシゴを降りていった。

十メートルくらい降りると、床に足がついた。

そこは、暗い空洞のようなところ。闇に覆われて見える範囲は狭
い。上の入り口からそそく光の助けもあるが、やはりそれだけでは、
ここがどのようなところなのかは確認できない。声が響いて聞こえ
ることから、かなりの広さだということはわかる。

おれはすぐに上の二人へ叫んだ。

「大丈夫だ！ 問題ない！」

すると、二人はすぐに降りてきた。

「……なあゝにが、『問題ない』だ？」

おれと同じように闇を見回したエンドーがおれをにらむ。

「だって、そう言わないと、お前ら降りてこないもん」

「あのねえ。ぼくたちだって悪魔じゃないんだよ。キミ一人を危険
な目に遭わせて逃げるなんて、神に誓ってしないさ」

神様、この嘘つきを呪い葬ってください。

「ふふふ……。まんまと罠にかかったな？」

闇に声が響いた。

「かかってやったんだ。ありがたく思え！」

反射的に叫んだが……。だれ？

いや、聞き覚えがある。

そう思ったとき、声の主が闇の中からぬらりと姿を現した。

「お前らか、侵入者は」

やはりあのゾンビ—— デンテールだ。

「生きていたとは、おどろきだ。もはや動けぬ状態だと思ったのだから」

「期待を裏切ってごめんなさいねえ」

エンドーの挑戦的な態度に、デンテールは口元を歪めて笑った。

「おれが手を下すこともないだろう。幸運は二度も続かない」

それを聞いて、ヨックくんが口を開いた。

「……なるほど、そういうことか。なぜ入り口が上にあつたのか……」

「ふふふ……。そう、入り口を上につくつたのは、お前たちを閉じ込めるため」

デンテールがカツと目を見開くと、おれたちが降りてきたハシゴが燃えて灰になった。同時に、天井のいくつかの電球が点灯し、闇を淡い明かりで照らした。

げっ……。

おれはとつさに武器を構えた。

デンテールの後ろに、ガイコツの軍隊が控えていた。

ざっと数えて二十体。

「ついでに——」

デンテールがスイッチのようなものを掲げた。

「ここに爆弾を仕掛けておいた」

「てめえ……！」

声は出るが、動けなかった。

ヨックくんもエンドーも、歯ぎしりをしてスイッチを見つめている。

カチッ……。

スイッチが押されると、ところどころで、ピッ、ピッ、という電

子音が鳴り始めた。

おれたちを地獄へいざなうかのように。

「せいぜいゆつくりと、苦しんで死ぬがいい」

ゾンビは笑いながら姿を消した。

「おい……。どうすんだよ？」

歩み寄ってくるガイコツ軍隊をにらみながら、二人に訊く。

当然答えられるはずがないのはわかっているが。

「脱出口は？」

ヨツくんのほうを向くと、

「今探している」

すでにヨツくんは魔力を使っていた。

どこまで見えているのか、おれにはわからないが、こいつになら何かわかるかもしれない。

「——トロツコだ。後ろにトロツコがある。それと、レールが地面を這って、どこかへ。……だめだ。それ以上は見えない」

トロツコか。この建物はもともと何のためにつくられたのだろうか？

「みなさん！ 急いでください！」

案内人の焦りの声。

そのトロツコにかけるしかない！

電子音はさっきよりもテンポを上げて鳴っている。爆発が近いのだろうか？

おれたちは一斉に後方へ走った。それと同時に、ガイコツ軍隊も走っておれたちを追う。

くっそ！ ピラミッドかここは！？

トロツコ――

たしかにそこにはギリギリ三人乗れそうなトロツコがあった。

そのレールの先に何があるかなんて問題はそのときでいい。とにかく、このトロツコを動かすことが先決だ。

ガイコツが剣を構えておれたちに襲い掛かるが、その攻撃を防ぎ、けりや拳を食らわす。

見た目どおりもろい体で、後ろに倒れると簡単に関節部分から崩れた。しかし、ここで考えられるゲーム的可能性は、そいつは再び体を組み立て、復活する、だ。

そうならないうちにトロツコを――

一人で骨どもと戦うおれの後ろでは、すでにヨツくとエンドーがトロツコに乗り込んでいた。

「マハエ！　むこうのレバーでトロツコを作動させてくれ！　大丈夫、トロツコのブレーキはかかっている！」

ヨツくんがガイコツの剣を叩き落しながら、おれに叫ぶ。

見ると、トロツコから10メートルほど離れた場所に、それらしいレバーがある。

たとえトロツコを作動させても、トロツコのブレーキを解除させなければ動かない仕組みだろう。

「よし！　任せろ！」

その代わりあとで殴ってやる！

ナギナタで目の前のガイコツを撃破し、レバーへ向かう。

ついでに復活しようとカタカタと動き始めたガイコツの頭を蹴り飛ばす。

ふと振り返ると、トロツコにも敵が集まっていた。ヨツくんもエンドーも必死で対応している。

次々と倒されるガイコツ。あの二人もなかなか強い。

デンテールは、おれたちをじわじわと追い込むために、わざと敵のレベルを下げたのかもしれない。

おれはレバーの前にいるガイコツの攻撃をかわし、逆に足の関節を攻撃。足を破損したガイコツはバランスを崩して倒れた。

大丈夫。トロツコ周りの敵はすぐに片づくはずだ。

おれは思い切ってレバーを動かした。

グオオン……。と、たしかに機械が作動する音が響いた。

おれはすぐに踵を返し、トロツコへ走った。

トロツコにまわりつくガイコツを後ろから崩していく。

と、そのとき、ガイコツが倒れ際にトロツコの何かを操作した。

「あー、マハエ、急いでー」

ヨツくんが苦笑しながら言う。

まで、まさか……。

ブレーキが解除されたトロツコは、勢いよくガイコツを振り払い、あっという間に遠くの闇へ消えていった。

文字通り「あっ」と言う間に。

……嗚呼、吹き抜ける風が冷たい。

15：吉野春時 前進します

吉野春時。通称ヨツくん。

ぼくは今、怒りと嘆きに満ちた親友の叫びを背に、先へ進む。

もう一人の親友は、ぼくの前で脱力している。

「ああ、マハエ……」

エンドーが残念そうに首を振った。

ぼくたちは今、猛スピードでレールの上を走るトロツコに乗っている。

甲高い音を鳴らしながらトロツコはカーブし、細い洞窟を進む。何かのアトラクションのために作られたのかな？

——で、早く脱出しないと爆発するんだった。

「ヨツくん」

前で進行方向を見ていたエンドーがぼくに話しかける。

「ん？」

「気のせいかな。壁が迫ってきてる」

のんびりとしたエンドーの声。

ぼくはトロツコの進むその先に目を凝らした。

うん。石壁で道がふさがっている。

「——って、壁——っ！——！」

「やはりそうか」

しまった！ デンテールに出口がふさがれていたんだ！

ぼくはブレーキに手を伸ばした。

すると、エンドーがそれを止めた。

「このまま突っ込むぞ！」

「……正気？」

「わかんねー」

「……………」

こいつと心中はやだな。

でも、意外と頼りになるやつだというのは間違いない。

任せるよ。

ぼくはエンドーの肩をポンと叩いた。

エンドーはそれに頷き、トロツコの前部に足をかけた。

ぼくは“見る”ことに集中する。

トロツコの動き、エンドーの動き、迫る石壁、そのすべてがスロ
ーモーションになる—— そう見える。

エンドーが動いたとき、周りの音は聞こえなくなった。

目の前で凄まじい閃光が起こり、レールを途切れさせていた石壁
をこじ開けた。

この威力は——

今のぼくには爆発の細部まではつきりと見える。

トロツコに向かって飛んでくる石をすばやく剣の柄で弾き飛ばす。

石でバウンドしながらも、トロツコは突き進む。

その先の光へ――

いくつもの爆発が一つの大爆発になり、地面を激しく揺るがす。

トロツコにブレーキをかけ、ぼくとエンドーは地面におりて遠くから立ち上る煙を眺めた。

「あいつはおれたちの英雄だ」

悲しげな顔で煙を見つめるエンドー。

そう、今のぼくたちの生は一人の親友の犠牲の上に成り立っているのだ。

「あいつの分までがんばろう。魔王を倒すんだ！」

ぼくが言うと、案内人が恐る恐るという感じで問う。

「……人間って、残酷なんですね……。親友が死んだというのに平然としているなんて……」

それを聞いて鼻で笑うエンドー。

「ふん。どうかな」

「あいつは昔からそうだったからね」

ぼくたちの様子に「は？」と疑問符をうかべる案内人。

そう、何とかなるものだよ、人生なんて。

「さ、城はすぐそこだよ。行こう」

トロツコを残し、すぐそこに大きく見えている城へ。

ぼくらの要望で、案内人が勇ましいBGMを流す。

そういえば、さっきの骨との戦いで、いくつかかすり傷を負ったのに、いつの間にか薄い線になって、ほとんど治っている。ぼくたちの体を流れる魔力の影響か、治癒力も並じゃないみたいだな。

「それにしても、さっきの力はすごかったね」

「切羽詰ってたからな」

エンドーが音楽にノリながら、鼻歌混じりに言う。

切羽詰った状況ね。もしかしたら、それが大技の条件なのかもしれないな。

ぼくの“見る”能力も、わかってきた。

まとめると、金縛り、望遠、暗視、動体視だ。でも、妙に疲れるのが難点か。

ふらふらと疲労を見せながら歩くエンドーを支えながら、城を見上げるほど近くまで到達した。

ぼくらは岩陰に隠れる。

エンドーは大技の後でだいぶ疲れている。

そして城の入り口には、身長二メートルをゆうに超し、筋肉隆々の怪物が。顔の真ん中に大きな一つ目がある。武器は持っていないが、あれが入り口を守る門番なのだろう。

「サイクロプスだ。有名なモンスターだな」

「へえ、ぼくは知らなかった」

「そのくらい一般常識レベルだぞ」

なるほど。おそろしいね、一般常識って。

入り口に扉などはなく、あの門番さえどうにかすれば侵入はできそうだが……。

「ところでキミは戦えるのかい？」

エンドーの様子を見て、心配になって訊いた。

「ん？ 無理」

「だろうね……」

「あんなのちゃっちゃと倒しちゃってくださいよ」

ぼくたちの苦勞をまったく知らない案内人は簡単に言う。

「よし。んじゃ、見つからないようにこっそり入るか」

お、エンドーがいいアイデアを思いついたようだ。

「名づけて——『抜き足、差し足、忍び足作戦』」

「それって、まんまそれじゃないの？」

「ふん。いいか？ おれが見本を見せてやる」

そう言つとエンドーは、木や草の陰に隠れながら、入り口から少し離れた壁に張り付いた。

そのまま慎重に、つま先を駆使し入り口へ近づく。

門番はぼーっと正面を見たままだ。侵入者が近くにいるなんて、微塵も思っていないのだろう。

そしてとうとう、門番の後ろへ—— 入り口へ到達し——

『プウ~~~~~……』

む。何か妙な音が……。

エンドーが蒼い顔で固まる。

……屁、こいたんかい。門番さん……。

『エンドー！ 大丈夫か！？』

ジェスチャーで尋ねる。

エンドーは迷わず顔の前で腕をクロスさせる。

「——くっさいじゃボケえ！！！ 何食ってんだ！？」

そして門番の尻を蹴り上げた。

「グア！ ナニモノだ！？」

しまった……。という表情をするエンドー。

「キサマ、コのシロにナンのヨウだ？」

エンドーは壁に追いつめられながら、横に目をそらして言った。

「いえ……。べつにたいした用ではないんですけどね……」

この状況をどうやって切り抜ける！？ エンドー！

「ちょこつと魔王を殺しに」

言っちゃった——っ！！！？

「アん？ ナンだと—— ！？」

ぼくは門番の動きを止め、走ってエンドーを掴まえてそのまま城の中へ駆け込んだ。

「キミはよくトラブルをつくってくれますねえ！」

「いや……。最後の望みにかけてみたんだが……」

「どんな望み！？」

「あいつ見た目バカそうだが——」

「バカはキミだろ！」

とりあえずは侵入成功。

16：高く高く―― 跳べ！

背後からの爆風に押され、おれは受身を取りながら前に転がった。後ろで炎が起こり、大量の煙がうねっているのは、見なくてもわかる。

少し遅ければ、自分もそれに巻き込まれていたのだから。

「いやー、何とか生きてたねえ」

おれは服をはらいながら立ち上がると、改めて後ろを見た。それにしても、ひどいことするよなあ。ゾンビ野郎。建物もガイコツ軍隊も、すべてが粉々だ。

さて、そんな中、見事に生還したおれに「無事だったかマハエ！」とか「怪我はないかマハエ！」などと、本来誰かが駆け寄ってきてくれてもよさそうなものだが……。

誰もいないではないか。

そこは草も木も生えていない荒野のような場所。

ヨツくとエンドーは脱出できただろうか？

一瞬不安になったが、すぐにその思いを捨てた。くたばったわけがない。

おれたちは昔から運だけはいいのだ。

おれも運がよかったと、つくづく思う。

正確には危機的状況下で、運のスキルがハネ上がるというべきか。

爆発の数十秒前――

トロツコに見捨てられ、ガイコツに囲まれたおれは、魔力を使つてその場をしのいでいた。

ガイコツは、衝撃波には特別弱いらしく、オークには転倒させるのが精一杯だった威力でも、容易にバラバラにできた。

しかし、そいつらはすぐに再生してしまう。

おれは逃げながら脱出方法を考えた。

足から衝撃波を放つわけだ。それを利用できないか？

放つ衝撃波をもつと圧縮できないものか……？

力を極限まで圧縮できれば……。

イメージするんだ。力を分散させず、一点に集中する。

骨に追われながらふと上を見上げた。

五メートルほど上に、ここに入ってきたときの孔が見えた。

一か八か。二度ジャンプしてから、魔力を振り絞って、着地と同時に足元の一点に叩き込んだ。

高く跳ぶイメージで――

圧縮された衝撃が地面を蹴るときに感じられた。

おれの体は軽くなったように浮き上がり、天井の孔を抜けた。

脚力だけではとうてい及ばない高さの孔まで、魔力の反動を利用して高く跳び上がることに成功した。

危ないところだった。

あんな状況でもアイデアは思いつくものだな。

それに、あの技を攻撃面に利用すれば……。

——よし、ヨックさんとエンドーは城へ向かっているだろう。急いで合流しなきゃな。

その荒地に生は感じられない。

歩いてても歩いてても、木もないし、草も生えていない。生えていても小さいのがちょこんとだけだ。

サボテンも生えてはいないが、気分はウエスタンだ。

暑く感じるのは周りの雰囲気のせいであろうが、BGMでも演奏してくれれば少しは気がまぎれる。

しかし、肝心の案内人は他二人のもとへ行っているのだろう。さっぱり応答がない。

まあ、それが二人が生きているという証拠なのだろう。

しかし……。この孤独感はなんだ？

ふっ……。涙も枯れてらあ……。

数十分歩いてようやく城の入り口らしい場所が見えてきた。

ひっそりとしていて小さい。おそらく裏口だろう。

二人は同じ道は通っていないだろうから、たぶん正面から侵入す

る、もしくはしたのか。

ここまで来れば、草もいくらかは生えていて、木もいくつがある。で、案の定、裏口には見張りがいる。

おれはホフク前進で木の裏に隠れた。

一体だけが、いかにも強そうなモンスターだ。

おれよりもはるかに…… “はるかに”デカく、プロレスラー顔負けの筋肉を持ち、顔の真ん中にある一つの目が、用心深く左右を見回している。

できれば賢く入りたいな。

戦闘というのは賢くないやり方であって、できればこちらに被害がなく、かつ静かに、侵入がバレないように。

高さ三メートルほどの障壁が城を囲んでいる。

この程度の高さなら、さっきと同じ方法で楽に跳び越えられるが、あれを使うと大砲のような大きな音が発生してしまう。これも賢いやり方ではない。

賢い者は、敵と接触することなく、見つからないように侵入するのだ。

そして、それを可能にするのが、コレだ。

おれは足元にあった石ころを拾い上げた。

それをできるだけ遠くに―― 投げる！

ガサッガサッ…… と、石ころが草の生えた地面を転がる。

よし！ 名づけて『小石ころころ番人さよなら作戦』！
番人たる者、少しの異変も見逃さない。その習性を利用し、遠くで音をたてて番人をおびき出す。そして無防備になった入り口かららくらく侵入するのだ。

さあ、さつさとその汚いケツをどけやがれ！

「番人は鼻をほじっている。」

気付けよコラ。

ずっこけて木に頭を打ってしまった。

「ムん？ ダレがいるノカ？」

おれじゃなくて石ころに気付けえー！ー！ー！！

おれは大人しく姿を見せた。

「ム……？ モクテキはナンだ？ コゾウ」

巨大な眼でにらみつけられ、うまく逃げ出せそうにない。

「えっと……。あの……。些細な用事なのですが……」

ここはうまく切り抜けるんだ。

何て言えばごまかせるだろうか？ そう、説得力とリアリティがあり、何気ない言い訳を……。

「ちょこつと魔王様に消えてもらおうかと——」

「……………」

「……………」

——逃走っ！

おれは防壁へ走った。

ハイジャンプして壁の向こう側へ——

リアリティあつただけどなあ。

ま、賢くはなかったが侵入成功か。

17：疾走！ひたすらに！

一つ目の番人は、防壁を凄まじい怪力で破壊し、おれを追ってくる。

ドゴン！ ドゴン！ と、足音がだんだんと追いついてくる。
なに城を壊してんだよ！

そこまでして追うように命令されているのか！？

丸太の見張やぐらが複数並ぶ広場に出た。

その上で、見張りのモンスターがおれに気付き、騒ぎ始める。
あまり敵に見つかりたくないのだが、やつがおれを追ってくるかぎり、止まることも目立たない道を探すこともできない。

壁を突き破るほどの猪突猛進ぶりだ。

やぐらの下をくぐると、やぐらは破壊され、上のモンスターが落下。
下。

その後のいくつもの低い防壁を、抜け穴を探しながら通過しても、番人はそれさえも破壊し、しつようにおれを追跡する。

途中の見回りのブタやオオカミにもかまわず、走り続ける。

動物園か、ここは。

あわれ、見回りはおれを追う番人に倒されていく。

もうおれを捕らえることしか頭にないようだ。

おれ一人ではどうにもならん！

ヨッくとエンドーはどこにいるんだ！？

建物内への入り口を見つけ駆け込んでも、やはり足音は追ってくる。

る。

石壁の廊下を、逃げ口を探しながら、全速力に更に拍車をかける。だが、松明が並ぶ廊下の壁に、ドアやは一つもなく、行ける道を行くしかない。

「シトメろお！」

前から複数のオオカミ——『ドッグ（エンドー命名）』が、横一列に並んで、ナギナタを前に突き出し突っ込んでくる。

くっ！ 次から次へと——

おれはそれを、魔力で跳び越えて逃げ続ける。

番人に踏みつけられるドッグの悲鳴を、曲がり角でさえぎり、まっすぐ。

と、そこでヨッくんとエンドーが向こうの曲がり角から現れた。

「おお！ ヨッくん！ エンドー！」

よし、これで三対一だ——

二人が現れた角を、追うようにもう一体の二つ目モンスターが。

そっちもデスカー！！？

おれたちは廊下の真ん中で向かい合ってブレーキをかける。

「元気かい？」

ヨッくんがおれに問う。

「鬼ごっこできるくらいね」

で、進路も退路も鬼に挟まれたわけだ。

「ああ、マハエさん！ よかった！」

ほっとしたような案内人の声。しかし状況はちっともほっとできない。

「ここだ！」

エンドーが叫ぶ。

首を横に向けると、大きな鉄扉の存在に気付いた。

「だめだ！ ロックされてる！」

エンドーが上のかんぬきを見上げて舌打ちする。

だが、横を見ると、もう一つの小さな入り口があった。

そのドアから鉄扉の向こう側へ侵入。

そこには、高い塔へ渡るための跳ね橋が降りていた。その下は目が眩むほど深い巨大な穴。

おれは塔を見上げた。

「ボスはあるそこか」

そして、デンテールもいるのだろう。

ゲームクリアは目前だ！

ドグン！

後ろの鉄扉から、それを破壊しようと殴りつける音が響く。

「もたもたしてられないね。行こう！」

ヨツくんが跳ね橋の横にあるレバーを操作した。

おれたちは徐々に上に傾いていく跳ね橋の上を駆け抜ける。

「跳べえ！」

限界まで走った足に最後の無理を言って、橋の開いた隙間を跳び

越えた。

ドグワァン！

そのとき、後ろで鉄扉が破られたが、おれたちはすでに安全域。だが、驚くほどしつこい二体のモンスターは、上昇する跳ね橋に飛びついてきた。

「しつねんだよ！ 往生しろ！」

エンドーの力が二つの球体となって、それぞれの顔面で炸裂！低い叫びを発しながら、二体は穴の底へ落下した。

——ガコン……

九十度の壁となった跳ね橋に寄りかかって、おれたちは同時に座り込んだ。

「ああ…… もうこれ以上無理させないでくれ……」

エンドーが唸った。

おれもこれ以上にきついのはもうゴメンだ。

「いよいよボスカ……」

塔入り口の、これまた大きな鉄扉を隅々まで眺めた。

敵が出てこないか？ せめて今だけは休憩タイムにしてくれ。

「どうだいマハエ。一度死んだ気分は？」

おれの隣のヨツくんが、前を向いたまま訊く。

あの爆発のことか。

「いい気分だぜ。なんかスッキリした」

下を向いて苦笑するおれたち三人。案内人が少し怒った声で、ヨツくんとエンドーに言った。

「知っていたんですか？ マハエさんが生きてるって」

「ぼくたちが知っていたのは、マハエ（こいつ）が簡単に死ぬわけがないってことだけだよ」

「そうそう。前に施設の人々と海へ行ったらさ。こいつ、浮き輪で波にさらわれて行方不明になったんだぜ。あのときは、もう全員があきらめてたね」

エンドーがおれの心の傷を叩く。

「……ふん。あれはおれを夢の世界へ導いた海の野郎が悪い」

敵の本拠地のど真ん中だというのに、おれたちはしばらくの間、談笑していた。

なぜこんな気分になれるのか、自分でもわからない。ただ、もしかしたら、心のどこかではすべてをあきらめていたのかもしれない。

生きて帰れないのではないか？

もう運は尽きたのではないか？

……馬鹿らしい。

18：意思と命令

「せーの！」

おれたちは重い鉄扉を押し開け、塔内部へ入った。

ラストステージ――

おれは目を閉じて深呼吸する。

何もない。何もいない。ただの広いホール。

見上げると、天井はずっと上のほうにあるようで、暗がりで見えない。

ここが本当に、ボスステージなのだろうか？

何かの仕掛けがあるのかもしれない。

そう思い、探索を始めようとしたときだった。

ジリリリリリ！ というけたたましい警報音とともに、大量のネバネバ――『ネーバ（エンドー命名）』が落下してきた。

「畏か」

ベチョン、ベチョンと、ネーバは落下し、おれたちを取り囲んだ。この半透明のネバネバ生物は、物語のような可愛らしいものではなく、目も、はつきりとした形もない。正直、一番気持ちの悪いモンスターだ。

ぬらぬらと押し寄せるネーバたち。
ゼリーの海を思わせる光景だ。

「うおりゃあ！」

ナギナタを横に一振りすると、五匹くらい水しぶきのようになつて消滅した。

エンドーもハンマーで一匹ずつ地道に倒し、ヨックくんも剣で応戦する。

ザコはザコだが、地味に邪魔だ。

そういえば前にこんなゲームがあつた。

一度に大量の最弱モンスターとバトルして、後半レベルの主人公を大苦戦させた。

一回ゲームオーバーになつたっけ……。

その主人公の二の舞は嫌だな。

ネーバは、おれたちの体にまとわりつき、自由を奪う。

そいつらを掴み、投げ飛ばしても、次々とわいてくるからキリがない。

こんなところで、ムダに体力を使うわけにはいかないってのに！

「ふふふふふ……」

聞き覚えのある笑い声が響いた。

デンテールか！

すると、おれたちを包囲していたネーバたちが、バシャバシャツとはじけて消えた。

ガゴウン……

足元がかすかに揺れ、床が上昇。

いよいよなようだ。

今更だが、心臓が高鳴る。

果たしてここで朽ちるか、現実世界に帰ることができるのか。
確率的には――

いや、勝てばいい。勝つしかない。

あの憎ったらしいゾンビをぶっ飛ばす！

ゴウン……

到着。

さつきは高すぎて見えなかった天井が、はつきりと見える高さになって、床の上昇は止まった。

そこは部屋の真ん中。

さつきの一階とは少し違って、赤いじゅうたんが敷かれ、その先にあるのは豪華なソファ――

「よく来た。プレイヤーの諸君」

ソファに座っている男が、偉そうにおれたちを見据えた。
赤い長髪に、色黒の肌。

デンテールではないその男は、ソファから立ち上がると、ゆっくりと歩み寄ってきた。

「これが、現在のボス。コードネーム“HIMURO”です」

「……………」

おれたちはつつこまない。

現ボスの名前が前ボス、『デンテール』からかけ離れていようと、日本名だろうと！

「氷室テツシだ」

下の名前があるうと！！

「氷室、あんたもデンテールに改造されているんだろ？ なぜあんなやつに従う？ 自分の意思をしっかりと持て！」

氷室はおれの説得には、反応しなかった。
代わりに別の声がそれに答えた。

「ムダだ。そいつも元は戦闘プログラム。お前たちを倒すためにつくられたプログラムだ。セルヴオになろうと、そいつはその“命令”には逆らえない」

デンテールの声だ。

それは上から聞こえる。

「もつとも、おれがその“命令”を強力なものに改造しておいた」

デンテールは、壁に貼り付けたように設置された椅子に、足を組んで座り、おれたちを上から見下ろしていた。

気に食わない。

この世界のすべてがデンテールを中心^{まじ}に回っている。

ここは胃袋の中というわけか。

“意思”よりも“命令”か。

「コラ、ゾンビ！　そこで待ってる！　氷室^{こいつ}倒して、次はお前だ！」
エンドーがデントールに切れる。

「ふふふ……。どうやらお前らは不死身らしい。よかるう、ここま
でどう生き延びてきたのか、見せてもらうぞ」
相変わらずの上から目線。

……。ねじ伏せてやるさ。

「殺れ氷室。葬ってやれ」

「……。ああ」

“氷室”が腰の長剣に手をかけた。
ギリリと妖しく光を反射させながら、剣がゆっくりと引きぬかれ
る。

——いつ来るか。

おれたちは防御の体制をとった。

ピタリ。

氷室の手の動きが止まった。

そして、剣をさやにもどしていく。

なんだ——

「——っ！—」

一瞬、氷室の影が揺らいだ瞬間、強烈な拳の一撃がおれを襲っていた。

腹に岩を叩きつけられたような衝撃で、おれは吹っ飛んだ。

ヤベエ…… 速い……

おれは小さくバウンドしながら床を転がった。

武器なしで十分ってことかよっ……！ 完全になめられてるな…

…！

「マハエ！ 死んだか！」

「死んでねえよ！」

すぐに起き上がってツツコムおれを見て、エンドーは安心したように微笑んだ。

不意をつかれたが、今度はそうはいかないぞ。

デンテールはまだ、おれたちが手に入れた力を知らないはずだ。まだまだ。勝負はこれから。

おれは武器を拾い上げると、デンテールをひと睨みした。

「見てろゲス野郎！」

19：ノックアウト

デンテールは不敵に笑っていた。
おれの愚弄ぐろうの言葉にも微塵も動じない。まあ、当然だろうけど…。

“氷室”は再びおれに襲い掛かってきた。
一人ずつ潰していくつもりらしい。
ものすごい勢いで拳が近づく。
だがおれは動かない。大丈夫だ。避ける必要はない。

ゴオオ……

顔面直前で停止した氷室の拳。顔を吹き抜ける風が、直撃していた場合の悲惨さを物語っている。

おれはヨッくんに目を向けた。

ヨッくんは眼を銀色に光らせながらうなずく。

「ナイス、ハル君」

おれは動こうと足掻く氷室の腹に、ピタリと足をつけた。
あの大ジャンプ時の威力を攻撃に利用する！

「何をしている、氷室！」

デンテールが上から怒鳴る。
ムダさ。こいつは動けない！

「りゃああつ！！！」

おれは手加減なしに“衝撃”を撃ち込んだ。

「——っ！！！」

氷室はその威力で吹っ飛び、攻撃したおれも衝撃で後ろへ転がった。

だが、しっかりと見てやった。
デンテールの驚いた表情を！

さて、氷室はこれでノックアウトか—— と思ったが甘かった。

ヒュンッ！

何かが空を切ってこっちへ飛んでくる。

「マハエ！」

駆け出すヨツくんの叫び声も遅かった。

氷室の投げた長剣が音の速さで空気を貫き、おれへ迫る。

当然、座り込んだ状態でそれに対処できるほど、おれはアクションスターではない。立った状態でも避けることは無理だろうけど。

長剣がおれの頭を貫くのに0.5秒もかからない。

——はずだった。

長剣は、おれの頭すれすれを通り抜け、後ろの壁に突き刺さった。

「……………」

外した……？ あぶね……。

氷室はすでに立ち上がっていた。

おれもビビりながらも立ち上がる。

苦痛の表情で腹を押さえる氷室。与えたダメージは大きかったようだ。

もつとだ。これくらいじゃ勝てない。

やっかいなのは氷室のあの素早い攻撃。動体視力など養っていないおれにとって、これを回避するのは至難の業だ。

となると、やはりチームワークは不可欠だ。

デンテールは、さっきよりも真面目におれたちの戦いを見始めた。おれたちの戦術に興味を示したようだ。

だがそれは、おれたちの手の内をやつに見せることになる。

「ヨツくん。フォロー頼む」

おれはそれだけ言つて、ナギナタを構えると、氷室へ突進した。とりあえず、こいつはおれが倒す！ デンテールのやつにすべての技を見せるわけにはいかない！

「りやああ！」

ナギナタを一振り。しかし氷室はそれを軽くかわす。でも、それも計算のうち！

そのまま踏み込んだ足で衝撃波を放つ！

ズズウン……

狙い通り、床を広がった波は、氷室を転倒させた。

突然足をすくわれ驚く氷室に、すかさずナギナタを振りかざす。

しかし、次に足をすくわれたのは、おれのほうだった。

さすがは最終ボスとして作られただけのことはある。その戦闘能力に容赦はない。

仰向けの状態の氷室に足払いをかけられ、今度はおれが転倒。逆に起き上がった氷室にナギナタを奪われ、形勢は逆転。

ヨッくんが駆け寄って剣を振り下ろす。

だが氷室はそれをたやすくガード。そしてヨッくんに蹴りをかます。

しかし——ヨッくんには当たらない。氷室のすばやい連続技を、それに負けないスピードでかわしている。

これもヨッくんの力の一つか。

だが、それも長く続きそうにない。最初は完璧にかわしていたが、さすがに連続攻撃はキツいらしい。直撃は免れているものの、すでにギリギリ状態だ。何度か攻撃がかすり始めた。

助太刀をしようと、エンドーが腕を構えて敵を狙っている。

「まて、エンドー！ まだ使うな！」

デンテールにすべてを見せるわけにはいかない！ エンドーは唯一強力な戦力だ。ここでダウンされても困る。

せつかく、ヨッくんがおとりになっているんだ。

氷室は攻撃を当てようと、そちらのほうに集中している。

つまり、背後は隙だらけだ。

見ると、ナギナタは投げ捨てられていた。

さつさと攻撃しないと、ヨッくんがカワイソウだしな。

おれはナギナタをそつと拾うと、氷室を狙って構えた。

デンテールは見ている。だが、氷室にそれを知らせることはないだろう。デンテールは楽しんでる！

できるだけ足音を立てず、できるだけ助走をつけて。

バキッ！

おれが走り出すのと、ヨッくんは氷室の攻撃がヒットするのはほぼ同時だった。

宙を舞うヨッくん。一瞬、おれと目が合い、微笑んだ。

これがトドメだ！

ヨツくんが床に落下。そしておれのナギナタは、確実に後ろ姿の氷室をとらえていた。

ナギナタは見事、ターゲットの胴体を貫いた。

「……………」

……不思議な感覚だった。

たしかに、ナギナタは、氷室を貫いたはず。

それなのに、全く手ごたえというものがなかった。

目の前にいる敵が、まるでそこに存在しないかのように……。

存在しなかった？

いや、たしかにあの時、ヨツくんを攻撃していたのは氷室だった。実体のある敵だった。

少なくともあの時まで——

くそっ！ どこですり替わった！？

目の前の“氷室”を形成していた何か。それは霧のように空気に流され、消滅した。

分身……？ 幻術……？

本体はどこに！？

ふと、背中に不気味な気配を感じた。これが“殺気”というものだろうか？

背中をとられた……！！

——終わった。氷室はこの一撃で決めるだろう。

くそっ！ 体が動かない！

おれはここでゲームオーバー……か。

「——マハエ！」

エンドーの叫び声で、おれは閉じかけた目を見開いた。

「前へ跳べ！！」

氷室の攻撃に、明らかな隙が生じていた。

おれは足から力を放ち、思い切り前方へ避難した。

——爆発が起こったのは、直後だった。

いくつかの“魔力の球”が、氷室を取り囲むように配置され、そして一度に爆発。

氷室の悲鳴も、その爆音にかき消されたいた。

「——いつ……」

床に衝突したおれは、すぐにエンドーに目を遣った。

倒れる氷室の向こうで、力を使ったエンドーは険しい顔をしていた。

その表情から、エンドーの心中を読み取る。

『なるようになれ』

「……………」

おれは沈黙した。

『氷室 HP：0』

20：大ボス

エンドーの攻撃で、氷室は倒れた。

だが、その様子はデンテールにすべて見られている。

『なるようになれ』

……たしかにそうかもしれない。

作戦なんてどうでもいい。その瞬間の努力が、勝利をもたらす場合もある。

おれとヨツくんは、エンドーに親指を立てた。

さて、これでボスである氷室は撃破した。

だが、あと一つの難関。

“大ボス”のデンテールを倒さなければいけない。

本来なら、これでゲームクリアだったはずなのに……。泣けてくる。

デンテールはしばらく何かを考えていたが、指をくるりと動かし、とうとう高みに設置していた椅子をゆっくりと降下させた。

——いよいよだ。

デンテールは椅子から立ち上がり、身構えるおれたちの間を素通り。床に仰向けのままの氷室のところへ。

「やはり使い物にはならなかったか」

その声はゾツとするものだった。
デンテールは何もかもを、道具以下にしか見ていなかったのだ。
あの性格は、元々のプログラムのせいなのか、それとも現在の自分の意思なのか。

「くっ…… 油断した……」

氷室が傷ついた体を、重たそうに持ち上げようとする。

「ああ、お前は油断しすぎだ。ふざけていたのか？ まったく、甘ったるい戦いだった」

「くっ……」

デンテールは氷室に背を向けると、指をパチンと鳴らし、吐き捨てるように言った。

「消えとけ」

すると、氷室の体が表面から、まるで塵のように細かく砕け、舞い上がり消えていく。

「ま、まで……！ まだ――」

焦る声も、言い終わらないうちに、氷室は消滅した。

「なんてやつだ……」

エンドーは怒りに震えている。

道具以下……。

違う。デンテールにとってはすべての物が、ゴミ同然なのだ。

「さて、しかしまあ、先ほどは面白いものを見せてもらった」

そう言うと、ニヤリと笑った。

おれたちは差し詰め、実験用のモルモットというところか。

なに。負けやしないさ。

モルモットでも、三匹もいれば、クソツタレな科学者一人くらい倒せる。

おれは構えた武器を握る手に、力を入れた。

しかし、デンテールはその様子を不快そうに見ると、

「武器を使われては面白くない。おれはお前たちの“力”を見たいんだ」

そう言つて、人差し指を顔の前で横に動かした。

スーっと、武器の重みがなくなっていく。

おれたちが持っていた武器は、氷室と同じように、塵のようになって消滅した。

呆然と手元を見続けるおれたちに、デンテールが説明を始めた。

「その武器は元々プログラムだったものを、おれがセルヴオに改造した。つまり、おれの思うように操作できるというわけだ」

くそつ！ この卑怯者！

「この卑怯者！」

エンドーがおれのかわりに叫んでくれた。

「ふふふ、人間であるお前らが、どうやってそのような力を手に入れたか、研究する必要があるのではな」

へー、意外と研究熱心なこと—— いや、そんなこと言っている場合ではない。武器を失った今、素手で戦うのはほぼ無理だろう。残った魔力で倒さなければいけない。

とくにエンドーは、そのときの感情に任せて行動することが多い。しかも強力な技だけに、消費する力も大きいのだろう。

そうこう考えていると、

「そんなに見たいのなら、嫌と言うほど見せてやる！ 実際、嫌と

言ってもやめてやんねえ！」

やはり先制攻撃をかまそうとするエンドー。

とりあえず止めはせずに様子を見てみよう。

エンドーの腕から、“魔力の球”が放たれた。

「そう、これだ。一番厄介な技は」

デンテールはすばやく腕を動かすと、自分の前に“氷の壁”を形成した。

ドゥーン！！

球はその壁に当たり、爆発。デンテールは無傷だ。

ナントカの錬金術師かよ……。

この世界の万物を思いど通りに操作できる、か。

そして、唯一操作できないのが、おれたち。そして、この“未知なる力”というわけだ。

十分だ。それだけ勝利できる要素があるということだ。

もう希望は捨てない。捨てた時点で完全に負けは決定する。

「ぼくがやつ動きを止める」

ヨックンがおれにささやき、魔力を集中させた。

キーンという音が微妙な空気の振動を生み出す。そして力は、まっすぐにデンテールに飛んだ。

「……っ！　そう……　この技も非常に厄介だ……」

動かなくなった四肢を、どうにかしようと足掻いているようだ。

今までヨッくんのこの技を受けたモンスターは、声を出すことすらできなかった。だがデンテールは動けはしないものの、普通に喋っている。力を使っているヨッくん自身も辛そうだ。

でもおそらくこいつは、腕や指のモーションがなければ、“世界”を操作することはできない。こうしてしまえばこっちのもの！

足に魔力を溜め、それを凝縮させながらデンテールへ走る。

「もらったあ！」

跳び蹴りの勢いに、技の威力を上乗せする！

「ふふふ……」

だが、デンテールは余裕の表情。

「その技の欠点は——」

「うわっ!？」

突然、おれの目の前に氷の刃が降り注いだ。

「——攻撃目標に足が触れなければ、効果がないことだ」

そして、ヨッくんのほうへ視線を動かした。

「たしかに、おれは腕や指を動かさなければ、物質を形成することはできない。だが——」

ヨッくんの頭上、天井にいくつかの氷の刃が形成されていた。

「あらかじめ、物質を形成しておき、それを一定時間後に作動するように設定しておけば、そのときにおれの意思がなくなるとちゃんと作動する」

「ヨッくん！」

エンドーが、刃の爆破を試みるが、遅い。

静止状態にあった氷の刃が、ヨッくんめがけて落下する。

「クソツタレえ!!!」

おれは足に溜めていた力を、思い切り放ち、すばやくジャンプで移動。

間一髪、ヨツくんを刃の落下範囲から押し出した。

おれの足、すれすれのところで刃が碎け散る。

「サンキュー……」

「借りは返した」

ヨツくんの気が散ったせいで、デンテールは金縛りから解放されていた。

「雑魚なら、ぼくが集中していなくても一定時間は金縛りが持続するんだけど……」

「それだけこいつの力は強大だということか」

「——だいたいわかったぞ。お前らのその力は、たしかにこの世界のものだ。しかしそれをなぜ、おれが制御できない……?」

『どうやってその力を手に入れたのか教える』デンテールの眼は、そう言っているようだった。

答える気はないが、そう訊かれても、うまく説明できない。

「まあいい。これはおれにとっては脅威なのかもしれないな。脅威は大きくなる前に潰しておかなくてはならない」

デンテールを取り囲む空気が一変した。

「こつちも、本気で殺しにかからないとな」

ギラッ……

デンテールの眼が妖しく光った。

なんだ、この恐怖感は……?」

戦うことへの恐怖ではない。強い気魄に押しつぶされるようだ。

おもむろに、デンテールの手の平がおれに向けられた。

ドグッ！

その瞬間、胴体にもすごい衝撃。その痛みに気付いたときには、おれは床に仰向けで倒れていた。

「マハエ！」

ヨッくとエンドーの声がぼんやりと聞こえる。

何が起こった……？

ヨッくんが追い討ちを阻止しようと、デンテールの動きを止める。だが、さつきとは全く違う素早い動きで、音速で飛ばした魔力を避けられていた。

エンドーが放った魔力の球も、形成された氷の壁に阻まれた。

また二つの衝撃音とともに、二人も倒された。

力は圧倒的だった。

21：終わりだ！

こいつを倒すには、思い切り強烈な一撃を与えるしかない。

魔力を手に入れてからの驚異的な回復力のおかげで、痛みはすぐに治まった。

倒れたままの状態を考える。

やはり、チームワークは欠かせない。

攻撃のチャンスは限られている。できるだけ一撃に力をこめなければ……。

「ふん。ガツカリしたぞ……。こんなものなのか」

今までデンテールは、予想外の出来事を楽しんでいたのだろう。デンテールがおれたちに背を向けた。

「少しは暇つぶしになると思ったが――」

「……マハエ、エンドー」

ヨッくんの小声に反応し、見ると、指を動かしておれたちに集まるように指示している。

おれとエンドーは、デンテールが見ていないことを確認し（デンテールは独りで何やら喋り続けている）、ホフク前進でヨッくんのもとへ。

「あいつに攻撃を食らわす方法が一つだけある」

「どうやって……？」

「まず、攻撃役はエンドーではなく、マハエに任せる。そして――」

ヨツくんの作戦を聞いて、意気込むおれたち。

「——そしてこの力で、おれはプログラムを支配し、この世界を作り出した」

ちょうど、デンテールの話も終わったようだ。
なんか重要な過去話をしていたような気がするが、まあいい。

立ち上がったおれたちにデンテールが気付いた。

「ほう、そうでなくてはな」

「いい？ ミスは絶対に許されない」

「わかってる」

おれがやるべきことをやる。

任された攻撃役だ。とびきりきつい一発をお見舞してやる！

「行くぞ！」

エンドーの掛け声で、二人はデンテールの左右へ移動した。

「何か良い方法でも思いついたか？」

デンテールが突然移動した二人に気をとられる。

よし！

さっきと同じように、足に魔力を溜めながらデンテールへ突進する。

いや、さっきと同じではない。今度は両足だ！

両足に力を溜めながら走るのは、かなり集中力が必要だ。けど、敵の攻撃を避けることは考えない。

「なんだ。無駄だと言っているだろう」

デンテールが右手を持ち上げる。

「三方から攻める作戦か？　くだらん」

何もなかった空間に、氷の壁が形成される――

だが、そうもさせない！

絶妙なタイミングで、エンドーが放った魔力の球。それが形成途中の壁の中に潜り込んだ。

外側からは破壊できない壁でも、内側からならそれも容易だ。

「まさか……！？」

今更気付いても遅いぜ、デンテール！！

おれは左足に凝縮した力を、床を踏むと同時に放った。

ガシャアアアンツ！！！！

目の前で爆破された氷の壁。破片を真正面で受けながら、ジャンプで加速したおれの右足がデンテールを捉える。

デンテールが攻撃を避けようと体を動かす――　本人は動かしたつもりだろう。だがすでにヨツくんの力で、その体は自由を失っている。

おれとエンドーで気をそらせておいて、確実に相手を動けなくする。それも作戦の一部だが、一番重要なのが――

おれの攻撃だあ！

通常のとび蹴りの十倍強力な蹴り。右足が標的の胴にめり込んだ瞬間。右足のほうに溜めていた力を放つ！

『とび蹴り』プラス『衝撃』。それは、予想以上の威力でデンテールを吹っ飛ばした。

ズグウンッ！！

壁、天井、床が揺れた。

「ハハ…… どうだ、とんでもなく予想外だったろ」

壁にめり込んだデントールに、話しかける。

返事はない。

しかし、壁にめり込むほどの威力とは……。

魔力もほとんど使い切ってしまった。エンドーとヨックくんもそうだろう。

「ざまーみる……。 ははは……」

気抜けた笑いがこみ上げる。

「ハハハハハ」

——ガララ……

「ハハ………」

「……………」

……嫌な予感。

「く…… ふふふふ……」

デントール復活。

まさか…… なぜ……？ 壁にめり込むほどの威力——
そこでおれは気付いた。

野郎！ わざと壁をもろい素材に変えてやがったのか！ 壁をク
ッションにして衝撃をやわらげたんだ！

「今のは…… 効いたぞ……。 なるほど、見事な連係プレーだ」
「……………」

おれたちは言葉が出ない。

全員、魔力は使い切ってしまった。回復するまでに殺されない可能性は—— ほぼゼロだろう。

せつかく、追いつめたというのに、一瞬で追いつめられてしまった。

「——だが、そこまでだ。もはや、抵抗する力も残っていないのだろう?」

「くそっ……」

俺たちの配置は、さっきのまま、デンテールを囲むように右にエンドー、左にヨツくん。そして正面におれ。離れすぎていて作戦会議をすることもできない。

魔力は使えないし、武器も消滅した。どうすればいい? どうすれば……。

「考える間も、死への覚悟も与えてやらん」

何か良い方法は——

おれは辺りを見回した。希望など微塵もないのかもしれない。これは最後の悪あがき——

おれの視界に、気になるものが入り込んだ。

——ん? あれは……

「——死ね」

デンテールが右手をあげた。

「デンテール!」

ヨツくんの叫び声。デンテールはそちら側へ気をとられた。

おれはすばやく壁際へ移動すると、壁に刺さっている『氷室の長剣』を引き抜いた。

「エンドー! 今だ!」

再びヨツくんが叫び、エンドーがデンテールの気をそらすように、おれを完全に視界から消し去るように、走り出した。おれは剣を構え直し、一気に間合いを詰めた。

「何だというのだ。悪あがきか？ ふふふふ……」

「——ああ、そうさ。最後の悪あがきだ！」

ザスッ！

「——！！」

お前には後悔する間も、嘆く間も与えてやんねえ！

「き、貴様……」

胸の中心を貫通した長剣。

デンテールの拳に殴り飛ばされたが、痛くはなかった。

おれたちの、勝ちだ！

「くっ…… ふふふふ……。この程度で倒せたと思うな……！」

デンテールは長剣を引き抜こうとする。だが、剣に手が触れた瞬間、動きが止まった。

不思議そうな顔で自分の傷口を見る。剣が刺さった傷口から、ドロドロとした透明な液体があふれ出てきた。

「……まさか…… プログラムの暴走か……！？」

あふれ出る液体は、デンテールを溶かすように—— いや、デンテールの体が液体化しているようだ。

「ぐあああああつ……！！」

バシヤァ！

デンテールは散った。

——消滅した。

おれたちは呆然と、液体と化した“大ボス”を眺めていた。

……何だったんだ？ 今のは……。

デンテールが最後に笑った瞬間、今度こそ死んだと思った。やつは抵抗しようとしていたのだ。

おれたちは本当に、神と戦っていた。最期のあれがなければ、神に勝てるはずもなかった。

——いや本当の神が、おれたちに味方してくれたのか？

「……ゲーム、クリアだ」

おれたちは、今度こそ、心の底から笑い合った。

誰一人死ぬことなく、おれたちはこの、欠陥だらけのクソゲームをクリアした。

「お見事です。皆さん！」

突然出てきた案内人に、エンドーが文句を言う。

「案内人さんよお、お前、おれらが血を流して戦っている最中、一体なに——」

「制作者も、あなたがたに感謝しています。今回の件で、セルヴオのデータも、より詳しいものがそろいました。」

「……まさか、続編をつくるつもりじゃないだろうな？」

今、もっとも恐れていることを、訊いてみる。

「それはあり得ませんね。テストプレーでこのようなことがあれば、さすがに……」

「それはよかった」

——心から安心した瞬間だった。

「はやく、もとの世界にもどしてよ」

ヨックくんがあくびをしながら言った。

「はい。ただ今、準備中です。少々お待ちくださいね」

——だが、これは——

「準備完了です」

——おれたちの戦いの、ほんの序章にすぎなかった。

「転送、開始します」

けど、今は——ほんの少しの休息を——

『プログラム終了』

21：終わりだ！（後書き）

第一部、終了。

第二部へ続く。

なお、第二部からは都合により、文法を一新して書く予定ですが、あしからず。

そして、『おまけ話』も一つづつぞ。

おまけ：現実世界での戦い

目が覚めた三人は、今、自分たちが“存在”している空間の、隅々を見回した。

ここは、養護施設のベッドの上。

——三人は現実世界に帰ってきたのだ。

つい昨日まで過ごしていた部屋の匂いが、ずいぶん懐かしく感じる。

窓をおおうカーテンの隙間から、光が射し込んでいた。

「帰ってきたのか……」

マハエがつぶやく。

「どこから……？」

寝ぼけた声のエンドー。

「……思い出したくないね」

ひどく疲れた顔のハルトキ。

三人はとりあえず部屋を出た。

すると――

「あー！ シンエイたち、居たー！」

同じ施設の、小学二年生が叫んだ。

「小守くん！ 遠藤くん！ 吉野くん！ どこに居たの！？」

そして、三人に負けなくらい疲れた顔をした、女の先生が駆け
てくる。

ずっと三人を探していたのだろう。

「（もしかして、あっちの世界って、リアルタイム？）」

「（知るか！ ていうか、ヤバイ状況じゃね！？）」

「（逃げよう！）」

固まって小声で話す三人。

ずんずんと迫る先生。

そして、三人が、ポンツと手を打つ。

「おりゃあー！」

マハエは、片足で床を踏んだ。

ハルトキは、目を見開いて、先生の動きを止めにかかる。

エンドーは腕を振りかけて―― 停止。

だが――

「……出るわけないな。うん」

マハエ、そして二人の頬を冷たい汗が流れる。

『魔力』をあきらめた三人は、一目散に逃げ出した。

「一晩中、どこほつつき歩いてたの！？ 不良どもお！！」

いつの間にか合流した他の先生＆笑いながら一緒になって、三人を追う子供たち。

ドドドドド…… と、地響きが起こる。

「ゲームの中って言うたら、信じます？」

と、マハエ。

「なあに言ってるのぉ！！！」

先生たちの怒り、ヒートアップ。

「ぼくたちが追われるのって、筋違いだよな？」

早くもペースダウンしかけの、ハルトキが言う。

さっきまでのこともあり、マハエもエンドーも、すでにヘトヘトだ。だが、止まったら説教部屋行きは、まぬがれない。

「よし。制作者をぶん殴りに行こう」

エンドーが拳を固める。

「居場所がわかればな」

残念そうなマハエ。

やはり、あれは夢ではなかったのだな！。と三人は溜め息をついた。

——そしてとうとう、目の前に立ちはだかった、通称『クマ男』こと、園長先生。

噂では昔、アフリカで、暴れライオンを素手で捕獲するという仕事をしていたらしい。

あくまで噂だ。だが、そのクマのような外見を見ると、それも本当なのだろう。と思えてくる。

「大丈夫！ おれたちは、あれよりも恐ろしいモンスターどもと戦ったんだ！」

そう言うマハエの声は、震えている。

「そうだ！ 負けるはずがない！」

エンドーが、真っ先に園長に突っ込んだ。

「さらばエンドー！」

『クマ男』に突進するエンドーに、ハルトキが残酷な言葉を放つ。

エンドー除き、二人は急ブレーキをかけた。

「ええええええ！！？ チームワークはあー！！！！？」

涙を流すエンドーに向かって、腕で大きなバツマークをつくる二人。

そして、両側へ散開する。

だが、暴れライオンは、その二人よりもはるかに速い。

そして、それを素手で捕獲するという園長は――

ゴッ！

その場に閃光がはしった。

おまけ：現実世界での戦い（後書き）

— 沈 —

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2189c/>

造られし空の下で ～ 3つの闘魂～

2010年10月17日14時29分発行